明治二十五年十一月五日發行

女鑑

第二十六號

東京國光社

女鑑第二十六號目次

豐太閤の北の方



女鑑　第二十六號

女鑑

女教小言

およそ、生ある者誰か情なからん。情ある者誰か愛なからん。愛はそれ人の天性といふべきか。故に聖人の言を立つる、決してこの愛を離るゝことなし。苟も愛を離れば、未以て教とするに足らざるなり。

今の世、有性をして無情たらしめんと欲するものあり。眞愛をして僞愛たらしめんと試むるものあり。これ皆角を矯めんとして、却りて之を傷ふ類、其の謬亦甚しといふべし。女子は最感情に富むものなり。則其の心事も、亦純潔可憐の所あり。苟も之を教ふるに其の道を以てせば、能く一夫の爲に死し、能く一盟のため

に賴る。其の節操男子の多く及ばざるものあり。只それ之を敎ふるに、其の道を以てせず、此に於いてか、其の天性を殘ふに至る。悲むべきなり。

家庭の訓陶嚴重ならず。敎授の方法摯實ならず、富者は劇場に集り、貧者は寄席に簇り、鄭聲其の耳を紊り、佞言其の心を惑はす。舞衣翩々紅顏粉態の俳優を懌ばずんば、巧言令色綿の如き藝人を好むもの、今の上下の風なりとす。

試に冷眼を一開して、眼前の映象を撿せよ。金門朱屋の裡より、茅軒破窓の間を通じ、凡、女子の風、一に唯浮華に失せざるはなし。貴婦人にして、娼婦の態を學び、處女にして、妓女の粉を粧ふ。既に其の形を娼婦にし、妓女にす。其の心いかでか之に伴はざらん。宜なり。貞操倘ばれず。節義重ぜられず。書を讀む女史益多くして、親を愛する孝女ますます少く、物を識る才媛愈多くして、道を行

ふ貞婦愈少きを、噫、巳みぬるかな。今の教育を論ずるもの、一に女流の才識を開發することをつとめ、却りて、其の到底極致の要を忘れ、遂にこの悲境に陷らしむ。所謂有性をして無情たらしめ、眞愛をして僞愛たらしめんとするものにあらずや。

論說

女子獨立の一害

武谷水城

生存競爭の渦中に立て、偏に自活の業に汲々たるは、女子天禀の性理に非ず。天の此世に女を造爲したる本旨に非ず。天禀に叛き、性理に戻りたるもの、其結果として、早晚身心の變常を來すべきは、亦之れ生理の原則也。女子戾性の作業、

亦此原則に漏るゝ事能はず。則其結果として、身心の不健康を惹起し、或は病身と爲り、又は夭折し、特に既婚婦に在りては、嬰兒の成育に影響する、實に至大なるもの有也。

從來、病、死、共に、女よりは男に多く、長壽は男より女に多きは、古より今に至る迄、各國一轍也。之れ男女天禀任務、職守、の差別あるが爲、心身勞苦の度不同、病因に遭遇する事、亦異るが故なり。(各國奴隷賣買の盛なりし頃は、女の死數非常に多かりしと云。之れ心身元來羸弱なるに、男同樣に虐使せられて、終に之に堪得さるに依る也。)然るに、近年各國共に、生活の度進み、從て生計困難の度も增すに伴ひ、一方にては衞生の方法進みて、一般に病、死、の數減ずるにも係らず、或一部の疾に因る女の病、死、漸く比例的に增加の傾向あるを見る。

蘇蘭國の前統計局長スターク氏、曾て同國人十万人中、配偶者、無配偶者、の死數比較を報告せし中に、二十歳より五十歳迄の配偶者死數、千六十六人、同無配偶者千五百四十五人有。此は固より男女を混じたるものにて、女より男多きも、其無配偶者男女の比例を、配偶者男女の比例に較れば、比例上女多く、年を追て其率增加の傾ありと云。又佛國の如きは、無配偶者の數、年を逐て增加の傾ありて、特に巴里府は、生計最も困難なる爲、配偶者の數最も寡く、從て出產の數も亦寡し。西曆千八百六十八年には、人口千に對する出產數、二十六人五分なりしもの、千八百八十七年には、二十三人强に減じ、猶減少の傾ありと云。則無配偶者の增たる也。但、今日無配偶者の最も多きは、米合衆國にして、就中紐育府、和聖東府の如き、未婚婦の多きは、可驚有樣にて、特に生

涯婚嫁せず、女子の天性に背て終世を空過し、孝子慈孫の何物たるを解せざるものゝ、實に夥しく、中には女子獨立など、稱へて、高く標置するが如きものも有べけれ共、其實は、万己を得ざるに出たるものにして、憐れにも亦氣の毒の至也と云。其茲に至りたる原因は、拜金國の習ひとして、男女共に婚を撰ぶに、只財産と身分とを目的と爲す事と、生計の度高くなて困難なると、貧人の非常に多數なる等に在り。されば、彼國に於て、結婚は人生至極の難事にして、亦至極の榮譽なるの証は、時として、黄白を以て、何某の妻といふ名前を買受、表面丈け、既婚婦の体裁を裝ふもの有。斯る笑止の事共少からず。固より女の境界茲に至るは、已を得ざるに因る事とは言ひながら、一方に在りては、之れに伴ふ氣象等、自然の長所も亦少からず。只我邦洋風崇拜家が、彼の

有樣を表面より一瞥して、深く其實を探らず、單に女權の進歩して、茲に至りたるものと思ふが如きは、大なる誤解といふべし。

此多數の無配偶者は、不得已皆自立して、各生路を求めざるべからず。於茲乎、力業に從事するもの有。學術に從事するもの有。就中、工業に從事するもの最も多し。近世醫家の報告に據れば、此等の結果として、女子の精神病、肺病、及心臟病、に罹るもの、漸次多を加ふと云。而之れ獨無配偶者のみならず。配偶者と雖、中等以下にありては、生計の困難なる爲、亦女子の職外に活路を求るもの、年に増加し、近年米、英、を初とし、佛、獨、各國、製造場に關する法律の問題は、既婚婦特に子女ある婦人を、製造場、職工場より謝絶するの可否にあり。謝絶の得策なるは、万口所認なれども、實際行はれ難き事情不少。抑無配偶の女子が、

分外の業に服するも、其利害一身の他に及ばざるも、配偶特に子女あるものに至りては、獨り一身に止らず、毎日幼稚の兒と離居せざるを得ずして、爲に天與の母乳を以て、鞠育する事不能、勢ひ他人に托して、牛乳若くは他の混和食料にて、成育するもの比々皆然り。之れが爲に、嬰兒の夭折數は非常なるを見る。西曆一千八百八十年、獨國衛生局の報告に據れば、

生兒一千人に付、一ヶ月以内に死するものゝ平均數、生母乳二十人八分、乳母乳十六人八分、動物乳(牛乳等)百五十七人三分、擬乳製品(混和食料)四百三十七人四分、豆粉百四十八人四分とす。其十ヶ月以内に死亡の平均數、亦之れと順比例を爲す、

（未完）

女子要言

三輪田眞佐子

第一回

緒論

紅花爛熳として、薫郁園に滿つるの春なりと夢しに、忽ち宇内骨相を呈し、人影地に在るの冬至る。是れ天地循環の自然ならずや。芙蓉の巒峰雪を戴き、人煙邊に集る候。密士斯失必河上、納凉の遊舟翩々たり。是れ東西所を異にする光景ならずや。雜草芒々として、人跡至らざりし武藏野に、高閣軒を並べ、事轂相擊ち、人肩相摩する帝都を見る。是れ古今推移の現象ならずや。抑も此等を冒頭に書する所以のものは、決して空文を弄する次第にあらず。實に人生の境遇を知り、變遷を悟り、而して東洋西陸、文化の異なる道理を解するに足る、必要の言句なり

と信ずるなり。

試に、我が國古今風俗、及び思想の變遷に付き、一二を例證せんに、古代我が國の人は、筒袖を服せしが、應神帝の世に至りて、韓風の濶袖に變じ、而して今や、亦洋風の筒袖となれり。古代は坐禮を制とせしが、天武帝十一年、立禮を用ゐ、而して其の後、亦跪禮匍匐の舊式に復せしが、今や亦洋風の立禮をなせり。亦古代は垂髮の風なりしも、天武帝の頃より、結髮となりしが、今や亦垂髮の女子を見るに至る。其の他、一夫多妻を當然とするあり、一夫一婦を可とする等、枚擧に暇あらず。殊に女子の風儀は、上古は男子は陽を以ちて立ち、女子は陰を以ちて從ひ、能く孝に、能く貞に、而して節儉以ちて家事を守り、慈愛以ちて赤子を育つる良俗なりき。然るに、中古に至り、世の泰平に件ひ、風流奢侈の

事、漸く行はれ、貝合、艷詞合等の歌合起こり、今樣、及び俗曲等も行はれ、男女の交際も親密となり、遂に歷々の淑女も、化粧以ちて饗筵に歌舞し、婚姻も媒酌を藉らず、自ら詩歌以ちて愛情を通じ、其の極戀歌の流行となり、亦今日の所謂、遊女なるものゝも、此の頃より出でしならんと云ふ。且つ其の前後、乃ち一條帝の朝、藤原道長の女、中宮上東門院、文學を嗜み、秀才の女子を召されしより、紫式部、清小納言等の才媛、續出せりと雖も、其の節操缺くる者ありしと。左れば女子にも、聰明の才器ある先例を垂れ、後世女子を奮起せしむる力あると同時に、其の非行の聲、幾千代に聞こゆるは遺憾なり。斯くの如き始末を見るもの、或は曰ハん。風儀は恰も四季時候の如く、推移循環止まざるものなれば、時勢の流行にさへ從へは、別に撰擇を要せずして可なりと。是れ大に誤れるなり。夫れ

四季の變更は、春夏秋冬の天則ある所以にして、萬古不易の道を進むるなり。何ぞ常なきと言ふべけんや。而して此れと同じく、人も亦常あり。故に、裝飾如何に變ずるも、歸する處、用と文との二者を離れざるなり。我が神代より、衣褌を着せしは、寒を防ぐ用をなし、御統の玉を掛けしは、文をなす所以なり。其の思想も、節操正しからざる時は、後世なほ之を責むる如き、理と善の標準ありて、歲月に伴ひ、多少の偏倚あるも、根底より變ずるにあらず。例之ば、一夫一婦は道理にして、我が神代より、一陽神一陰神、相偶するを聞くも、未だ多妻の先例あるを見ず。其の后、血統斷絶を恐れて、妾を置く風儀ありと雖も、固より妻たるにあらず。然るに世には、我が國の風俗、及び女德等を浮雲視し、野蠻視する女子多きに驚けり。

（未完）

羹に懲りて膾を吹く論

棚橋絢子

己が此論題を女鑑に掲げしを、世の父兄達は、何とか思ひ玉ふらん。此頃教育社會の一問題となりて、最も憂慮すべきは、女學校の衰態にぞある。顧ふに其原因は、家庭教育の素なきに由來するを思はずして、ひたぶるに、學校教育の不完全を責むる結果とこそ知られたれ。抑も明治の初年に當り、百度一新、古風地を掃ふと同時に、世こぞりて女學の奬勵に忙はしく、深窓の處女をして、一旦父母の膝下をはなれ、笈を千里に負ふの、雄々しき心ばへを振り起こさしむるに至りしは、我國女子の前途に、一大福を與へし者といはざるを得ざれども、其間に一種の書生風を養ひなし、幽閑貞靜などいふ固有の美風は、いつしか朝の霜、夕の

霧となりはて、また男女のわいだめあるをしらず、出でゝは都大路に手を携へ、或は車を同うし、入てはこゝの宴會に袂をつらね、かしこの酒樓に席を同うし、忌み憚ることなきが如き、あらぬさまになりもてゆき、罪を歐化主義に歸する社會の攻擊、四方に起こり、敎育上の一大波瀾を起こすに至れり。是れ然しながら、智育の一点に傾きし諸學校の過ちにして、不完全の責をいひとくに由なからん。其弊を矯めて、古に回さんとする德義論者の反動力、勢を逞うし、洋語を遣ひ、洋服を着、交際社會に翺翔する生ものしりの女生徒は、婦人社會に齒せざる有樣に至れり。こはよみすべき事なれども、勢の偏重は免れざるものにして、一も固有二も固有、弊をためて弊に入るの傾を生じ、俄料理の羹にこりて、學問も工藝も、舌をやき唇をこがす物とのみ見誤り、別に一種の味ある膾を吹く、無考の親

はらからも出來にたる者ならし。それ女子の本分は、操正しく夫につかへ、家事經濟に心をつけ、家庭の敎育に意を用ゐ、裁ち縫ひ烹たきのわざにして、偖は洒掃應對など、日用のさゝやかなる務をだによくすれば、事たるが如くなれども、天保の昔と替はり、海の內外、事繁く開けたる世にしあれば、物學びの道たど／＼しく、古今のたがひめをも辨へず、月花のまじらひに、ふみかきかはす事だにえしらで、鳥のあと、心の程、みやびわざに疎からんには、みがゝぬ玉の心ちぞすなる。あはれ世の愛しみある親同胞たちよ。既往のあやまちにこりて、將來の悔を遺さじとの慮りは、さることながら、末たのみある愛子のため、はた家のため、國のために、芝蘭玉樹を庭階に繁らせ、歴史上に光りある、英雄豪傑を造り出ださんとならば、學校の敎育を置きて、他に道はあらじかし。しかはあれど、德義

の本に培ひ、良妻賢母となりぬべき素をなすは、家庭の教育にこゆるものなく、繪の事は後にして、學校教育は、工藝の技に達する良田美地となるものなれは、其心して性質の美惡を撰び、其監督其人を得て、修身のほそをかため、女學再興の先導者たらん事こそ願はしけれ、己千々に思ふ心を、

麓路にいりたつ人は多けれど高嶺の月をみはてぬぞうき

みがゝずは玉も石にてはてなまし學びの窓に心ゆるすな

末遂に國の光と成りぬべしほたるに雪にをこたるなゆめ

始ありて終なきこそうらみなれ學のみちにふみなやむ人

思ひいる學の窓しふかゝらは心をうつすみちくさもなし

史談

豐太閤の北の方

小野利三郎

清洲の城主織田信長、稍隣國の將士をして懾畏せしめたるころなりき。御小姓に、前田犬千代といへるものありけり。荒子の城主前田縫殿助利勝の男なり。容貌人に勝れ、文武の道はた劣らず。清洲の少年を數ふるものは、必ずこの人より始めき。同じ時に物頭つとむる藤井又右衛門が女に、お八重といへるありけり。女にては、必ずこの少女より始めき。犬千代この少女のことを聞きて、いかで得てしがなと、ねもごろにそのよしを又右衛門に請ふ。又右衛門喜びて諾ひぬ。人々も似つかはしき縁談よとのゝしりあへり。又右衛門このよしをいひ聞かせけるに、女おどろきて破談を請ふ。恥づかしくてなどおもひ、とかくそゝのかせど、切に請ふのみなり。又右衛門困じはてゝ、破談のことを木下藤吉郎といふに頼みぬ。先の日、役人の數にいれられ、三十石の扶持を賜はりたれど、まづ又右衛門が屋敷の中に住みけるものなり。このもの容貌猿に似たればとて、大方の人はうちつけに、猿よ猿よと呼びあ

なづりけり。才の敏きさま、げによく似たりなどいひて、猿と呼ぶもありけり。藤吉郎、犬千代の家にゆきてこの事をいひしに、犬千代、親の諾ひしこと、その條理きかでは、ととみに聽き入れつべくも見えず。藤吉郎いはく、かの少女は、既に僕と約せり。君の請ひし時は、少女がこのことを、父に請はむと念ひし時なりきと。犬千代、な謀りそ。其の身が、とたしなめまほしきを念じて、然ることありけるか。さては如何に思ふも詮なからむ。われ汝のために媒すべしといふ。かの少女をして、自恥死せしめむの心あり。汝先づ皈れ、われ直に之のことを計らむと、藤吉郎の固く辭するをも聽かざりき。又右衛門之を聞きて更に困じ、妻子を集めて喞ちしに、お八重進みて、藤吉郎に適かむことを請ふ。父は便なきことに思へど、女の志に感じ、且つは犬千代の詞の否みがたければ、遂に之を許し藤吉郎に適かしむ。數日を經て、犬千代その不快のさまを見むとて往きけるに、お八重厨よりいでゝ懇に媒の勞を謝せり。衣服など極めて質素なりけり。犬千代大に耻ぢ悟り、これより藤吉郎と斷金の交をしてけり。この婚姻は、城中の士女總べて、似つかはしからずといひのゝしり、お八重を愚と嗤ふさへ多かりけれど、お八重は少しも意とせず、誠實に

藤吉郎を助けたりき。後信長死し、藤吉郎四海を掌握して、豐臣秀吉といひけるころ、お八重は政所と稱へられ、犬千代は、利家といひて、秀吉殿肱の臣たり。お八重後に高臺院と號す。天下今は婚姻の當時を賞嘆するばかりなりき。實にありがたき婚姻なりけり。今世に流行する約束などとは似ていみじく異り。

山内一豐夫人若宮氏の傳（承前）

細川潤次郎

御家傳記は實錄なれども、尋常の手紙の如く、筆に任せて書き綴りたるものなれば、前後の照應などに意を留めず、之が爲に、事實も不明瞭となれることあり、夫人御內通の文は、笠の緒に仕込みたるかと見れば、別に文箱ありて、封のまゝ家康公へ指出されたり、飛脚孫作盜賊の爲めに、衣類刀脇指をはぎとられ、丸裸となりて、笠と下帶とまでになりたれば、別に一物もなきやうなれど、文箱をば持ちたりと見えて、其の下には、文箱笠とをとられざる樣に心懸けたるよし、記しゝは矛盾なるべし、且夫人の御文は、笠の緒に仕込みて、一通のやうにもあれど、其前家康公の仰に據れば、封のまゝ指出されたる文箱の內に、夫人の文あるやうなれば、二通にや

あらん、且孫作が持たる文箱の外に、增田長束等の、大通公に送れる狀もありしやうに見えたるが、此また笠と文箱の外の物のごとく見ゆ、此等の事實不明瞭あるは、記者の筆の廻はりかねたるによれる者ならん、余が想像する所に據れば大阪にて、夫人の認められし文は二通にして、一通は御內通の文にて、尤他見を憚る者あれば、笠の緒の內に仕込まれたるならん、如何樣なる文字なりしかは、知るべきやうもなけれど、御家傳に見えたる、德川家に無二の忠節を盡すことを勸められたるが如きは、家康公へ指出したる、封の儘の文箱の內にありしやうにもみゆれども、恐らくは、笠の緒の內にありしものを、混淆して記せるものあらん、賴山陽の咏史の詩に、隔離兒女死生關、際會風雲向背間、一條笠繫八行字、博得海南千里山、といへるは、能く此の意に叶へり、此の一通は、舊藩士の記錄の、小山陣を記せる者に據る時は、大通公一覽の後、火の中に入れられたるよしにいへり、左もあるべしと思はれたり、今一通は、當時普通の事情を報知するまでのものにて、增田長束等の大通公に送れる檄文の如きものと、共に一つの文箱に入れたるものにてはなきや、此等は單一ある報知あれば、縱令ひ人に奪はれ、人にみらるゝも、後難を遺すべきものにあ

らされば、文箱にも入れたるものにてはなきや、日本外史によれば、家康公は封を披き書を見ずして、夫人の文をば、大通公へ返されたるよしに記せり、是も左もあるべきやうに思はるれど、舊記に合はず、外史の文に曰く、山内一豊之室、自大坂馳使告事、以路經敵中、劈書為笠紐、一豊得之、不解而獻、内大臣還之曰、猶觀也、此れ夫人の文二通あることを知らずして、混淆せるものならん、笠紐とあせるものは内大臣に獻せるものに非ず、獻じて、還されたるものは、文箱の内に在りしものなるべし、

右にいへる市川山城、及び飛脚孫作二人のことを、爰に附録して、參考に供せんとす、山城の事は、小田原の役にも見えたり、舊藩士の記録に據れば、小田原の役に、數度火矢を放て、敵味方の目を驚かせしこととあり、其の外高知築城の時の記録に、左の如き文あり、

市川山城 隱居領四百石、役石見、

右火矢打申事上手故、折々從浦戸大高坂へ參候て火矢打、且神道者に付、天守之石垣出來、中臣祓國家安鎭の法修行、山城へ被仰付候、此者先年一豊公之、奥州

御出陣の節、大坂に被御坐候御内室様之事、無御心許思召、道中丸子より、大坂え山城を被遣候處、江州水口長束大藏大輔正家領分に而相支、則熱田の禰宜の姿に成、色々抜越し申、無異儀大坂へ通る、武士は神道心得申事之徳ありと、一豐公常に御意なり、

此の記録の言に據れば、山城は平生神道に心懸ある者なるゆゑ、熱田の禰宜の姿にもなり、祝詞をも讀む眞似などして、關所を通ることを得たるなるべし、若したゞ扮裝のみ、禰宜の姿に擬したることならば、祝詞を讀むときにいたりて、忽ち敗露せしならん、又飛脚の孫作は、本孫之丞と稱せしが、此のときの功勞により、祿を賜ひ、士分に取り立てられ、田中孫作と稱して、子孫祿を世々にせり、孫作の美濃路にて奪ひ取りたる刀脇指傳へ來りしが、近日其家衰へたるにより、之を賣却して、谷氏に歸したりと云ふ、此刀脇指は、其家に取りては、大切なるものなれども、其品は觀るに足らざる者なりといふ、左もありぬべき事にこそ、

大通公、江州長濱在城の頃、天正十三年十一月廿九日、大地震あり、公も夫人も、僅に身を以て免かれたれども、一人の女子與禰姫といへるを亡はれたり、與禰姫は當

年六歳なり、夫人の寵愛極めて深かゝりしを、夜半の地震にて、倉卒の際、倒れ屋の爲に打れてうせにけり、夫人の愁傷一方ならざるべし、其の頃左右の人のいへるには、城の外に拾子あるを見懸けたり、藁にて作りたる巢の内に入れ、短刀一口添へたれば、武人の子にてもあらんとの事ありければ、夫人憫れのことに思はれけん、家臣五月茂右衛門に命じて、之を拾はしめ、拾ひたる子なれば、拾と名づけ、己の子として養育せり、此の拾子は、何人の子なることも知られざらんを、實は家臣北村十兵衛正雄といへる者の、第三子なりと言ひ傳へたり、夫人は此の子の成長の後は、出家せしめて、與禰姫の菩提を吊はせんとの心組ありけり、御家傳記に據れば、拾は慶長元年、正法山妙心寺に入り、南化國師の弟子となり、侍者として其の教を受け、同三年、喝食となり、同五年、始て剃髪して宗化と稱す、大通公も素より、南化に歸依したる事故、妙心寺の中に一つの支院を建立し、大通院と名つけ置きたれば、宗化をして此に住し、院務を掌らしむ、宗化は此の如く、南化の教を受けたれども、少壯の時の事なれば、未だ悟道徹底の域には達せざりしが、後にハ單傳和尚の法を傳へ得て、高僧となり、京師の大通院と、土佐の吸江寺とを兼帶して、常に

兩地に往來せり、是即湘南和尚なり、吸江寺は古き禪刹にして、夢窓國師の開基ありといへり、此寺には近日まで、見性夫人の遺物もありて、馬代に充てたりし黃金を藏めたる鏡の匳も存せしが、今はいかゞなりにけん、湘南和尚の出家せし所以は、此の如く言ひ傳へたるが、別にまた一說ありて、舊藩士の記錄に見ゆ、

或る說に、見性公拾子を拾はせられて、御實子の如く、御いつくしみ深く、育てさせ給ひけり、大通公も御子おはしまさぬ事あれば、幸の事に思召、後には養子にもし給はんとの御心もありけるが、見性公より御養子の事、御進めさせ給へども、うけ引給はで年を經ければ、此子ありてはあしかりなんと思召、湘南和尚に向ひ、今までさま〴〵恩を厚し、育てさせ給へば、如何の事の給ふとも、いなみ給ふまじき也と尋給へば、いかで背き奉らんと答給ふにより、吾子爰に居て爲ならぬ事あり、何方へも行て、僧とあり給へとの給ひて、守刀を與へ、又黃金百枚を出し、之を以て學問をもし給へと宣ひて、御家を出し給ひければ、大通公の御した心も、詮なく成て、竹巖公を御養子とし給ふといへど、何の據る所もなく、いぶかしき事にてそ、

又一說には、大通公に一人の妾ありて、其腹に男子生れけるが、公は夫人に對し、憚かる所ありしにや、其の事を匿して告げざりしを、いつしか夫人の耳に入りたるより、夫人は本意なきことに思はれ、ある日佛寺に參詣して歸る途中より、妾の生みたる嬰兒を連れ歸り、公に申すやうは、妾今日佛參の途中にて、捨子を見懸け、憫れなる事に思ひ、連れかへり侍るに、妾に子なければ、養育して、つれづれを慰めたし、いかゞあらんとありければ、公の心中にては、いかゞ思はれけん、されども、之を拒むべきやうもなければ、しからば養育せよと申されたり、是即湘南和尚なりといふ、此の說は、昔見たる記錄の趣にて、曾て余が漢文もて書きたる、見性夫人逸事といへるものに援引せり、三つの說、いづれ信ならん、定めがたし、

（未完）

家政

育兒小言（二十五）

武谷水城

遊嬉の事幷玩具の事

遊嬉は、小兒の身心の發達する、自然の妙締にして、母親たるもの、常に注意して、抑壓に失せず、放逸に流れしめず、其道に從て保護を加へ、訓導爲す時は、德性を涵養し、智識を發達せしむる事、至大なるべし、人生幼時の遊嬉は、生涯の運命に關するもの有と、古人は言ひき、

小兒生れて四五ヶ月を經る時、注意して其擧動に氣附る時は、早く旣に遊嬉の意あるを認むべし、それより少しく成長して、玩具を與へて遊ばしむるに至るは、智慧を開發するの初めにして、小兒はいつとなく、玩具の性質をも識別し得るの、智慧を生ずるに至る也、

遊嬉は最も小兒の身心を樂しましむるものにて、其玩具は、身を傷ふべきもの、偏れたる音を發するもの、形の醜きもの、色合の惡しきもの、又復雜のものなどは與へず、成るべく形の正しきもの、又は淸き音の發するもの、色合の正しきもの、形の變じ易くして毀れ易からぬもの、等を撰びて與へ、又は單純にして、取はづして再び組立の出來得るもの、などをよしとす、何にても、後來智慧を進めて、德性を養

ふべき、助と爲る品を撰みて與ふべし、近頃は學問の道理に依りて、造りたる玩具も少からず、品を撰みて與ふべし、されども、玩具の餘りに高尙に過ぎたるものは、宜しからず、何によらず、折〻は取替へて與るを良とす、さすれば、小兒遊嬉に倦まずして、心を喜ばしむべし、只餘りに屢取替へて與ふる時は、小兒終に物に倦き易き性を涵養し、後來耐忍の力乏きに至る、宜く注意して、其中庸を採るべし、總て無益有害と認る玩弄物は、一切與ふべからず、玩具は、小兒の伴侶なり、朋友也、有害の玩具を與ふるは、惡しき友と交るに等かるべし、

小兒二三才以上にも爲る時は、常に家外に出るを好むものなり、心任せに爲すべし、土を取て丸と爲し、家を造り、車を製え、草を植ゑ、花を挿し、瀦水を引きて川と爲し、石を疊みて池を湛へ、或は雪中に奔走して、雪球を擲つ等、之れ皆小兒の天稟にして、其間に心も强く、身も健かに、智慧も自然に增すもの也、然るに、小兒が此等の遊嬉を爲すを見て、日光に燒くるを氣遣ひ、衣服の汚るゝを厭ひて、一向に其遊嬉を抑へ止めんと爲すは、大なる心得違にして、此くする時は、自然に小兒の奮發心を減じ、進取の氣を挫くに至るべし、非行有害と認めぬ限りは、自由に此

等の遊嬉を爲さしむべし、
小兒は前にも略述置し如く、又種々の物を造り見んとする心強きもの也、之れには紙、鋏、糸の類、若くは木片なども與へて、自由に任せ置き、時々指導すべし、之等は皆、後來物理を研究する働きの、本と爲る事なり、
繪本の類は、小兒の玩具に適當のもの也、され共、能く其本を撰ぶ事肝要なり、蓋、屢々耳目に觸るゝものは、終に心底に透徹するもの也、されば、忠臣、孝子、勇將、義士、等の事蹟を繪きたるものを弄ばせ、其繪を常に見て、其事柄を心に記憶させ、折節其事柄の大要を説き聞かす時は、小兒の心田に、いつしか忠孝節義の種子を生じて、年と共に次第に成長爲すべし、文字を知らざる嬰兒と雖、常に目に見、耳に聽く處、忠孝、節義、仁愛、道德、の事のみある時は、成長の後は、不レ敎して、自ら善事善行を爲すべし、古今一事業を爲して、名を後世に遺したる偉人の、何に依りて斯る志を興せしかを尋れば、小兒の時、古人の事蹟を顯はしたる繪を見、若くは其事柄の話を聞て、偶然に、我も斯くこそあらまはしと思ひ起して、幼心一點の燈火、終に不レ滅して、後來に至り、大に光輝を發したるもの少からず、之に反して、

或は根もなき事共を書顯はし、又は卑猥に近きもの、或は俳優の繪などを、常に玩具に與ふる時は、其何たるを解する力なきも、いつしか此等不良の種子、小兒の心田に發芽して、後來徳性上の大害を爲し、智識の發達をも亦傷ふべし、例之ば、今日の平假名新聞に記する、小說の書などの如きも、多くは、男女の間の事柄、又は遊妓の有樣などを顯はす、小兒之を見るに慣るゝ時は、徳性を傷ひ、氣魂の發達を妨ぐる事、少からず、又狐の婚嫁の繪の如きも、一寸の考にては、格別害なき樣なれ共、狐は怪獸にして、人を魅するものとの感覺れ、深く小兒の心に印識して、容易に拔取るべからず、終には怯懦の性と化すべし、世の小兒に豪膽のもの有、怯懦のもの有は、(大人に於るも亦然り、)一瞥する時は、偏に其人の天稟なるが如くなるも、子細に注意して、其原を觀察する時は、少くも其半ば以上は、生後家內の自然の敎化に依るを發見する事、容易なるべし、

常に玩具を容るべき箱、若くは籃を、小兒に與へ置て、用ゐざる時ハ、此內に納置かしむべし、隨時隨所に散らし置く等の、慣習を附べからず、此箱は小兒の自由に任せ置き、遊嬉の後は自分にて取片附しむべし、玩具を取散したるまゝ、外に出行

し時は、其儘に爲し置き、歸り來りたる後に、必ず自ら取片付しむべし、之の己の爲し丶事と、己が所持したるものとは、己自ら所置を爲さねばならぬもの、といふ事の、慣習を爲すに肝要の事にして、何に付ても、此の如くに養成する時は、成長するに從ひ、自然に人に倚らず、自助、自立、の性を涵養し、後、世に立て事を處するに、規矩ありて、人に頼らず、十分に職任を盡すの素と爲るなり、高貴の家に生れたる人、奮發の氣象に乏しく、自ら事物を處置するに慵きは、全く小兒の時、乳母、侍婢、などが、事毎に世話を爲し、本人は何事をも、自分自ら爲さゞりし、結果にして、事毎に人に依頼し、成人の後、自ら家事の取締のみならず、一身の始末も出來ざるに至るもの無きに非ず、此等は皆幼時より、涵養の素なきに依る事也、玩具は適宜に數を限りて與ふべし、好むに任せて濫與爲べからず、其利害は、前回に述べ置ぬ、

料理法（六）

待月　莽

當座煎海鼠の事

一生海鼠のはらをぬき、鍋に壹寸程摺ぬかをしき、其上へいり子を置、また其上へぬか二寸程しき、水を入よく煮、いかやうにも料理につかひ可申事、

魚生干之事

一何魚にても三枚におろし、目を抜とり、水に喰塩より、すこしからめにしほを交よく〳〵洗ひ、其儘日にほしおき可申事、

魚塩ぬきの事

一三枚におろし紙に包、上を水にてぬらし、日かげ温氣なきところへ、一日一夜つつみおく事、土中に入置てもよし、

干物やはらげやう

一干肴水に三日ほどひたし、たび〳〵水をかへ、さて後遣ひ候事、また粕につけてもよし、

干鮎の仕様の事

一鮎を串にさし、こげぬやうに焼、十四五日つるし、日干にいたし置、霜月ごろより箱に入置てよし、腹をとりおけば別てよし、

雉子もどきの事

一鰹よく洗、三枚におろし、血あいをうす身、皮を去り湯をかけ、引裂また湯をかけ、水にひやしよく雫をかわかし、酢醤油にてつかひてよし、

梅が香の事

一鰹節わらくかき、水にてざつと洗、此鰹一ぱい、酒一ぱい半、水半盃、梅干數見合、右三いろ合せ、一度焚、塩見合に入、汁を外へ溜置、せんじ詰め、いく度にも右の汁をさし、煎詰候事、

又梅がゝの一法

一鰹こまかに削り、とはしにておろし、壹升の粉に酒壹升、醤油六合、水五合あはせて、ひた〳〵に入、炭火にてそろ〳〵焚、汁ぶん〳〵つまり次第さし入、梅干肉すりて壹つ、梅實皮を去て一つ、干ざん椒湯につけ、内の實をとり、こまかにきざみ少々、右みしなよく煮つめ、壺へ入置時は、いつまでも持候なり、

數の子漬やうの事

一かづの子を布の袋に入、流水につけ置、一日にて匂ひ去り、風味よくなりたるを、

酒の粕につけてもよし、また桶に水一盃入、砂三合程、數の子に交漬、一晝夜に
てよくつかり申候、

味噌汁のしほを取事

一魚類しほの辛きか、またはみそのからき時、のべては薄くなり過、いかにも詮方
なきとき、玄米の飯こわく焚、茶袋に七分目程入、右の汁の中へ入置、煮候へば
忽からみぬけ、上味噌の味となり申候、これは料理家の極秘傳あり、急なる時は
小き袋五つも六つも入可申、玄米なき時は、常の飯にてもよろしく候、

夏の飯もたせやう

一上白米すこしこわく焚、にえ立、木を引ほどなく、あたゝかなるうち、器物へ入
よく押へ付、ふたをいたし置べし、凡二日位は持ものなり、

魚に醉たる藥

一橄欖、目方壹匁に、水一杯半入、一ばいにせんじ服用すれば、立所に治す、

喉に魚のほねの立たるとき妙藥

一よくいにん、これを粉にして、白湯にてもちうべし、又はふせん花の實、五六粒

のむもよし、どちらも妙薬あり、

○青物漬樣の事

つけさゝげの事

一大さゝげ十把、玄米飯一升四合、麹四合、右大さゝげ、鮓の如く、しほ澤山に入、少し押を置、出し遣ふ時、よく塩を出すべし、色かはらず、

椎茸の事

一干しひたけつかふ時、前に茶かすと、茶の煮汁とに交、しばらく置バ、椎たけよくふくれ、生椎たけのとほりになりて、裏の赤みも取れ候なり、

塩出のし事

一精進漬物のしほを出し候は、水に塩を少し交、暫く置ば、しはぬけ申候、しぶなき時は、栃の葉にてもよし、

漬松茸の事

一つぼみたる松たけの石つきを去、よく湯煮をいたし、ひらきたる笠と莖は、別に湯煮をして雫をたらし、能さまし、塩を桶の底に入置、其上へ松茸を入、またし

はをふり、すれ合ぬやう、青松葉を間に入、漬候なり、但桶の底に四處ばかり、きりにて穴をあけ候事、

看護法捷徑（三）

三笠の舍主人

（三）病室の淸氣法

一空氣は、食物よりも猶大切のものにて、數分間呼吸を止めて、空氣を取らぬ時は、生命を失ふもの也、故に空氣淸良なれば、最も人の健康を進め、不潔あれば特に健康を害するのみならず、大に病を增惡せしむるもの也、(淸良の空氣は、吾呼氣に依りて肺臟の中に來り、此處にて、全身を養ひて養分を失ひたる不潔の廢血に、己れの性分たる酸素を附與して、再び新鮮の良血と爲して、全身を營養する也、然るに、空氣不潔なる時は、此大切なる酸素に乏しきのみならず、猶其外、種々の有害なる瓦斯、若くは毒氣、若くは多くの病の源因ある所謂「バクテリア」と名くる至微の有機体を含むが故に、血を新鮮に爲すの力少きのみあらず、其含みたる異物の爲に、甚く病を增惡せしむる也)、病室は患者の晝夜共に起居する處にして、

室内の空氣最も汚敗し易きものなれバ、清氣の法は特に肝要の一事也、

二病室内の空氣を汚穢ならしむる源因、種々あり、則病室内に人の多く集る事、燈火、若くは火爐の多き事等は、皆空氣中の酸素を耗して、惡氣を生せしむるもの也、又患者の両便、汗、垢、其外創所より出る膿汁、汚液、又は創に用ゐたる不潔の繃帶、綿、等は、皆室内の空氣を不淨ならしむるものなれば、此等のものを、總て直に室外に移すと同時に、室内の陳き廢氣を驅り除きて、清良新鮮の空氣を導くべし、之を換氣法、又清氣法とも云、搆造も法に適ひて、且清潔ある病室と雖、此換氣の法、宜を得ぬ時は、空氣の清淨は保ち難きもの也、

三換氣法に二樣あり、一は、壁、床、等の氣孔を透りて、自然に空氣の交代するもの、及、窓戸の隙より交代するものにて、之を自然換氣法と云、二は、換氣窓とて、特更に空氣の交代するが爲の窓を造り、或は常の窓と、室の入口と相對するものを開き、又は煖爐を焚き、室内の空氣を煖めて、室外に散せしむる等の法にて、之を人工換氣法と云、何によらず、窓戸を開け放して、新鮮の外氣を室内に通するは、最良の清氣法也、

四　窓戸を開きて、空氣を交換するには、直に患者に風の觸れぬ様に爲すべし、故に外の風の向に背きたる方の窓を開くか、又屛風を建てゝ、風の道を遮りて、其向を變せしむるか、又は上下に開閉する窓あれば、其上部を開くべし、決して直に患者に對したる窓戸を開くべからず、若相對したる窓戸を開く時は、空氣の流通劇しき故に、患者の被衾を能く被ひて、直に風の觸れぬ様に爲すべし、其外發汗するもの、若くは温保すべきもの等の、總て風を忌む患者は、先能く衾を被ひ、或は特更に一枚の衾を加へたる後に、窓戸を開くべし、然らざれば、患者更に感冒するの恐あり、

五　窓戸は毎朝掃除の後、凡そ五分時間以上開くべし、夏日は朝夕二回開くを良とす、其他、繃帯交換の後、又は両便等の排泄後には、其都度三分乃至五分時間開くべし、又臨時室内の掃除の後、又は重病者の褥等を交換したる後は、少し長く開放すべし、通常夜間は開くを禁ず、又室外の空氣、不潔のものを混じて、惡臭ある時は開くべからず、其外、夏の日中、日光の直射する時も、已むを得ざる事有に非ざれば、開くべからず、

六傳染性の甚しき重症患者にありては、外氣の通過は特に有要なり、可成十分に窓戸を開放して、十分に外氣を通ずべし、實驗に據るに、此等の患者に在りては、外氣の侵入によりて生ずる害よりも、室内にて汚敗したる空氣中にあるの害、遙に大なるのみならず、新鮮の大氣は、斯る傳染性の熱病者の、治癒を促すの功大なるもの也、

七病室内に、草木を適宜に置くは良なれども、芬香ある花草は惡しく、又夜間は凡て室内に草木を置くべからず、晝の間は、草木の綠葉より、彼の人身の養ひに大切なる酸素を吐きて、室内の空氣を、自然に清淨にすれども、夜間は、之に反したる炭酸を吐きて、却て空氣を毒するもの也、

學園

文學小傳（承前）

難波津淺香

藤原爲業

藤原業爲は贈太政大臣正一位長良公の裔なり、父を丹波守爲忠といふ、爲業、崇德天皇の御代に仕へ奉りて、藏人に補せられ、伊豆守又伊賀守に任じ、皇太后宮大進となれり、和歌の名人にて、又文章を善くせり、後に剃髮して、名を寂念と更め、大原山に隱れ住めり、其弟賴業も寂然と名づけ、又弟爲隆は寂超と呼びて、兄弟三人倶に世を逃れて、其山中に棲めり、世人之を大原の三寂といひしとぞ、

爲業、嘗て大鏡といふ書を著はして、上文德天皇の御代より下は後一條天皇の御代に至るまで十四代百七十六年の間の事がらを記せり、其書のさま、世繼の翁と夏山繁樹といふ二人の老人、雲林院の菩提講の折に出あひて、其若かりしときより見聞せし事どもを、談りあひしさまに書きなせり、されば一名を世繼物語ともいふ、凡古の國史實錄などいふもの、いづれも漢文にて記されなどして、心ゆかぬ事どもあるを、これは假名文にて、しかも事こまやかに、うるはしくしるされたれば、今も其時世の有樣を目の前に見たらんやうにて、いとおもしろく、又益あるものなり、されど、其書文德天皇以前の事闕けたれば、內大臣中山忠親公、之を歎きて、水鏡といふをあらはして、其已前に遡り、神武天皇の御代より仁明天皇の御代まで五十四

代千六百十年が程の事蹟を記されたり、其後また大政大臣從一位一條冬良公、後鳥羽天皇の御代より後醍醐天皇の御代までの事を書きつぎて、増鏡と名づけられたり、世に之を三鏡といふ、外に又續世繼とて世繼物語の後を繼ぎ、後一條天皇より高倉天皇までの事を記したるあり、但し著者は詳かならず、されどなほ闕げたるところあるを、近き頃、荒木田麗女、彌世繼、又の名は月のゆくへといふを著はして、續世繼と増鏡との間、安德天皇の御代のほどの事を補ひ、又別に増鏡の後をも續ぎて、後醍醐天皇の御代より後陽成天皇の御代までの事どもを記し、池の藻屑と名づけられたるあり、この書どもによりて我國の歷史の假名文にてしるしたるものはほゞ備れり、みな爲業の志を繼ぎてかくなしけるなるべし、只、後陽成天皇の御代より後、今におよぶまでの事がらを、其書どもに並べて讀むべく記せるもののなきなん、いとあかぬ心地ぞする、

女服考（第六稿）

有住齋

女孺の袿衣

装束知新抄に、女嬬袿事、小袿裁縫衣に同レ、色目不レ定、襟袖裳に中陪を入、女官五つ衣の外に、畧の時用レ之、小袿重樣次第、單、次に衣、次に小袿、次に打袴、袷衣袿衣等の、稱は異なれども、其實は皆小袿なるべし、是等女官装束着用圖を縮寫して出せり、

又腰卷、張着、搔取、打掛など云名あり、

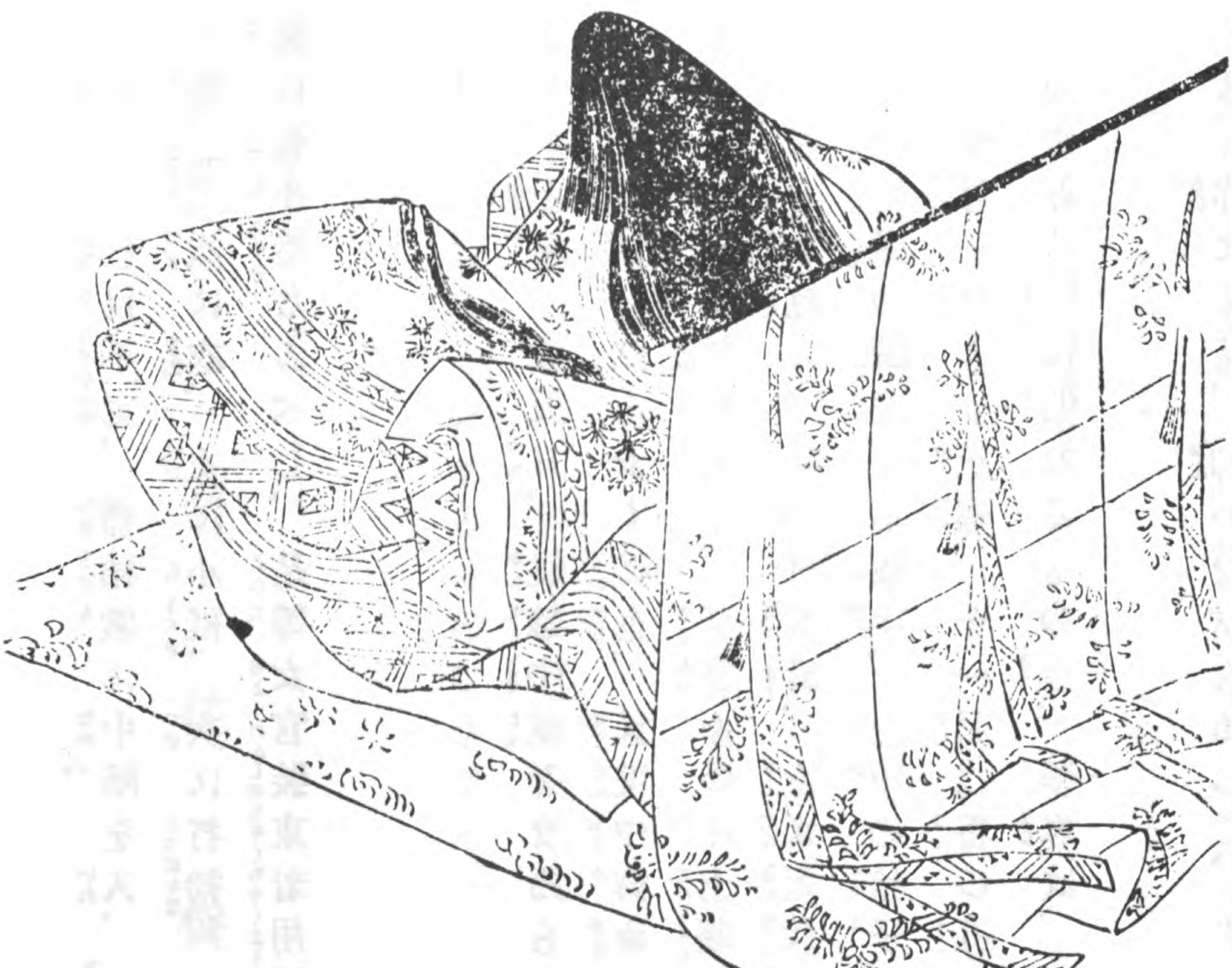
内院年中御儀式に、正月朔日、二日、三日、七日、十五日、從禁中献をまゐらせらる、御陪膳、上臈、中臈、女藏人、皆はつき、袴、びんぶく躰也、又院中御幸、宮に御參、御盃の時は、張着袴びんぶくすべらかしの躰也云々、又宮々の小上臈などは、不レ着袴、小袖に結中、或は唐織段の物など取也、（俗に腰卷と云なり）又云、女嬬近代不レ着衣、只小袖に萠木一重唐衣也、腰卷也、結中御殿の調度に不レ觸レ手、上下の格子、掃除、指油等の役也、又云、女院樣女中衆、十月一日より三襟、十一月二番の丑の日より、かたすそも、あかき裏、（とあるかたすそも袿に似たるもの也）腰卷は、四月一日より卅日まで、こしかうはい、

女房故實に、六月一日、こんぢしろにても、赤にても、御かたびらめして、すゞし

裏のこしまき、又云、御なりの時、ともの容躰、大上臈御二人斗り御參候、ゑぬひ物をめして、おり物を御かいどりに御さた候、御搔取の上に、胸の守御かけ候、うすおの扇を御もち候、

武家女房裝束抄上に、婚禮の裝束の事、上臈御裝束、四季に隨ひて、小袖或は腰卷を召す、冬の節なれバ、間に白綾をめし、御搔取は幸菱にて、ねもしの御かつぎ也、中略御色直には、黑紅

紫式部日記畫卷



梅を着給、是は祝の色なれば也、繪樣の付帶にて、御腰卷　黒紅梅に若松、雛鶴、或は寶盡の類の織物あり、

德川氏にては、搔取といひし也、其名も古し、袿の褄をかいどる故の稱なり、其製も袿に似たり、打掛と云も同じ、

筆の靈廿一前篇に、長門本平家物語十に、兵衛佐の御船也云々、兵衛佐は、打板の下にて、是らを聞給ひ



女官裝束着用圖

上古之小袿重樣之體
內衣、打袴、單、打衣、五衣、表着、小袿、
右上に重る衣寸法、次節に退る、
謂之女宿直裝束、如男官衣冠、
又曰、上古不着唐衣時、表着、上唐
衣代着小袿、

て、頼朝はてゝに在るはとて、打板の下より出給ひたりければ云々、打着をきて、は自に、其裾後方へ引れて、前はいたくあけバ、其つまを掻どりて物するにより、其方より呼て、かいどりと云へり、掻取は打着の余波也、徒然草に、物も着かへず、抱き持、ひきしろひて、にぐるかいどり姿のうしろでとあり、此外猶多し、

漫録

景山女誡（承前）

内藤燦聚寄送

學問に心をよすべき事

女子は婦徳をもて第一とす、其の婦徳を學んとならば、和漢の道の大筋をしらざれバ、事につけ、ものにつけ、迷ひ疑ふことありて、われしらず道に反く事あるべし、男子と違ひ、女子は人の家へゆくものなれバ、ものを讀習ふも、十二歳のころ迄に覺えざれば、其後はいかに習はんと思ひても心にまかせず、一生文盲と爲て、佛道などに欺か

るべし、吾朝にも、女子にて男子にもまさるばかりに文道に達したる人もあれど、是はいとまれなる事あれば、誰もさばかり文道に達せよといふにはあらず、只もろこしの書も、論語孟子をはじめ列女傳のたぐひ、大筋のわかりぬる程にはよむべく、我朝の書はかな文字多くよみ、易ければ、古より近き世に至るまで、公家武家のあらまし、明君良臣烈婦貞女の事など、おほよそに覺えぬる程のことは、いかほど覺わしき生れにても、かならずよみえらる、わざなり、いやしきものゝ女子といへども、女大學女四書などの大旨は知りてあるべきなり、女子は衣食のいとなみをはじめ、家事に暇なきものなれども、おのが好む事にはまもあるものにて、小身者の妻女も、佛道に迷ひぬるものは、朝夕いぬるひまをもいねずして、もの綴り又は念佛題目とやらんとなへ、或は淫僻異端にも劣らぬ草双帋などいへる、人を邪淫にみちびく書をよみ、左もあらざれば（脫字）誠の道を學んとだに思はゞ、それだけの暇はあるべきなり、まして位貴きものはど、自ら暇も多き事なれば、學文の末には、其の身柄に隨ひ、風流の道にもたづさはり、書畫茶湯などにも、一わたりしりてあらんは、中々にめでたかるべし、和歌も其道にのみ流れぬれば、いにしへ、御門の衰へぬる例にて、戒むべき事なれども、月を見花を見て、腰折の一つだによみえず、飲喰ひのみしてあらんも、餘りに無雅なれば、暇あらば、歌にもせよ、からうたにもせよ、ものするやうあらまほし、されどもこれ

らの事は、誠の道を心とし、婦徳を修めぬるあまりの事にて、誠の道をわすれぬれば、是等の業もなきにはしかざるべし、

貞節を守るべき事

女子は地道に本づき、婦徳を修むるを第一とする事なれども、婦徳といへるものゝうちには、すべて女の道こもりぬる事にて、又それが中に貞節はど、かたき事なかるべし、それ人の身の上に、正と變との差別あり、主君をはじめ、父母夫舅姑みな安穩にして、事なく目出たく世を渡るを、正と云ふ、其の目上の人々、おもはえぬ災難にあひ、賤き人にていはゞ、身を失ひ、貴き人にていはゞ、傾國をも失ふほどの事あるを、變といふ、正の時節にありては、溫順の道を守るべき事いふまでもあらず、さて變にあひたる時も、女は柔和のみ守るべきと心得あやまりて、目の前に我が目上の讐來りても、之を討ざるのみならず、或は讐の威勢盛んなるに恐れ、或は其の財寶などの多きに迷ひ、其の讐に頭をさげ、甚しきに至りては、身を汚せる類は、人と生れながら、禽獸にも劣れる心といふべし、さればいかに女子なりとも、かゝる變にあひたらん時は、鎗太刀もて刧さるゝとも、少しもさわがず、金銀もて欺むかるゝとも、聊もかへり見ず、紅の血しほに身をそむるとも、香しき名を後の世に殘さんと思ひ定むるぞ、貞女の操なるべき、かくては溫順柔和の道にたがひぬるやうなれども、是れすなはち地道なり、其故いかにとならば、地は土なり、土は柔和かなる

ものあれども、變におひては、銅鐵にもまさりて強きものなり、銅鐵さへも、火におひては形を失ふ、只土ばかりは、いくたび火におひても、其性を失ふ事なきのみあらず、反て其性ます〳〵、かたくつよくなるものあり、これ地は柔にして、貞の德を備ふるものとしるべし、貞とは、定まりてかはらぬ事をいふ、女子の變におひて、其の操を守るを、貞女といふも、この理なれば、目出たき代にも此心を忘るべからず、神國の風俗も、萬國にすぐれて、武勇たくましく、下賤の男にても、一刀を帶せざるはなく、女子にても、武門に於ては、薙刀を持せぬはなし、戰場に出で丶功名せし女子もあり、されど武勇と貞節とは異なるものにて、古より武勇も貞節もかねたる女子は、いとめずらし、板額の如く勇力ありても、貞節あきは女子の道にあらず、其上女子の天性すべて勇力あるべきものにあらざれば、女子は專ら貞節を心とすべき事あり、されどいかなる小身の妻女も、薙刀一ふりは必ず身にそふるは、神國のならはしにて、さて持程の品の振樣もしらずしては、おのが所持する品、却て敵のたすけともなりぬべく、いとあさましきわざなれば、薙刀は必ず幼なき時よりふり覺え、かの變におひたらん時は、讐敵にもあれ、盜賊にもあれ、夷狄にもあれ、腕のあらん限り扛振りて、一人づ丶も薙たふさんとたしなむべし、されどはじめにもいへる如く、目出度世には柔和温順を專らとし、災難におひては、貞節を失ふまじき事、女子の心すべき大筋にて、まし

て宦するものは、和漢古今の文どもをよみ、善惡是非を心に納め置て、變事あらん時も、主君に忠義を盡しぬるぞ、則ち天地自然の道にてそあるべけれ、神國は尊とくして、外國とかハリ、古來武を貴ぶ國風なれば、下人とても一刀を帶ざるはなく、女子といへども、長刀短刀を持ものは、變あらん時の備に仕來れるものなり、右よて思へば、女子はもとより力あるは希なれども、力入れずして、勇力すぐれたる大の男子にも勝べきものは鐵砲なり、されば小筒の打樣位は心得る時は、變に臨みて用立ちぬべし、抑も公家をはじめ、都下の人々の女は、父兄等衣冠束帶など着しぬる手傳も出來ぬるときけば、武門の女たらんものは、甲冑の着樣をはじめ、甲冑の手入、玉藥の製法、兵糧等、又は鞍の置樣等、父兄を軍に出しぬる手傳、婦人の手にて出來ぬるほどの業にて、心得になるべき事は、兵書中より見出し、又は人の話するにも心を付、胸に留なば、小身者は殊更、火急に臨みては、常ようかく〳〵嗜せる妻を持ちしと、又常々右樣の事に心を用うる妻娘あるとは、大きに相違すべし、婦女の軍よ出る事はあられども、小身者は、父兄弟を連よ軍に出しぬる爲となるべし、抑又婦人の軍に出たるも、板額巴の如く希にはあれども、たとへ出たりとも、婦人の出るほどになる軍よ、大方勝利はなけれども、禽獸さへも、他より來りて爭ふ時は、雌牝我が雄牡のうたるゝを見ては、只は居ず、雌牝相應に敵(脫字)一人づゝも雅作さんとたしなむべし、古は弓は武器の長なれば、本文へは云々書たれども、今我思ふに、古へ鐵砲あらば、婦人の力にて大の男も恐るゝは鐵砲にかぎれば、必小を持するならん、萬々一人不足せる時、常に心得ある婦人を狹間へ配り、鐵砲をうたせんに、婦人のうつ鐵砲なればとて、脫字大の男も近づかぬべし、又常に尺以下の短小の筒もひそめ持と聞かば、盜賊も恐るべし、抑此の如き心得の婆ならんには、たとへ自分はさのみ用立ぬにもせよ、其の產なしたる男子は、幼年より右の仕込にて成長すれば、武勇たくましくして、朝暮念佛題目淫聲を好む、あほうの女の產出たる子とは、相違なるべし、

（景山女誡畢）

野邊の若菜

忍の舍有義寄送

こは上杉治憲侯が、孫女祇姬君の緣付かるゝ折、かきつけて與へられしものなり、

文化十二年　祇姬君　治廣公御四女 山家へ御緣定　御出府之節
被進之

こたび江戶へ趣かるゝに付て、心の扣にもなりなん事、書記し參らせと、中の殿より請はれし、本より疎意にはあらねど、前に姉達へ申示せし

冊子、其外古人の女誡、女訓の書ども丶、目馴れ玉ひしなれば、舅姑夫君への事へられかたは、つきしこと、今はた衰老の身の、見及び聞及びしことも、いつしか遺忘せしめ、我身さへ覺束なう成行侍れば、拙き筆を染むるとも、何一益をなさん事も有まじけれど、中の殿の請といひ、又姉達へは申參らせ、今御身のみ遺さんも、本意にあらねば、左に記し侍る、

人は分に安んずるといふこと第一なり、分とは我身の生れ得たる分限なり、安んずるとは、それに安堵し、外を羨み願はぬ事なり、凡天地の間にあらゆるものは、皆天地の氣數に洩れたる物はなきなり、其氣數を得るうへに、窮通得失あり、是稟受のはじめに、おのづから分量有之、數の一定して移すべからざるものにして、呼で命とするものなり、その天地自然に受得たる氣數の外を、羨み願ふとも得べき事にあらず、外を願ひ羨む心から、却て我が受得たる氣數の福分を失ふ、色々の禍も生じ來るあり、人倫の上にていはゞ、王侯貴人と生るゝもあり、匹夫庶人と生るゝもあり、禽獸草木に至るまで、皆其ごとくにて、鴻鵠の大鳥あれば、燕雀の小鳥もあり、王侯貴人は、匹夫庶人を治めて、匹夫庶人に養はれ、匹夫庶人は、王侯貴人を養ひて、王侯貴人に治められ、其職分を失はず、鴻鵠は江湖に游泳して、飮啄時を失はず、燕雀は堂宇に飛翔して、乳哺時を違へず、千尺の松柏は、數年の緑を含み、數寸の花草は、一時の榮を發して、皆其受得たる氣數をもて、一生をす

ごしぬ、天地は所謂、栽うるものは培ひ、傾くものは覆へすにて、皆其自然にまかせて、それ〲に惠を施され、彼に厚く、是に薄きといふ事には非るなり、然るを、我氣數を知らず、天を怨み人をかこちなば、天理に背きて、天の御心に叶ふべきや、天の御心に叶はで、福分を得べき道理はなきなり、三姬のかたは、いふもさらなり、於貞の方は、三万石の小諸侯へ嫁され、於信の方は、三拾萬石の大諸侯へ嫁され、御身は、三千石の高家へ嫁さる、於貞の方は、三萬石の氣數を得られ、於信の方は、三拾萬石の氣數を得られ、御身は、三千石の氣數を得らるゝ事、是皆人の力のなす處にあらずして、おのづからなし、人の力のいたす處にあらずして、おのずから至るものなり、本より父母のうへに、彼を厚く、是を薄くといふ事やある、もとより父母の心にては、皆一樣にとこそ、おもふべきことに侍れど、其身〲の生れ得られたる氣數は、父母とてもいかにせん、譬へていはば、人身の長短、ひとしからぬがごとし、此理を心にとくと會得し玉ひて、分に安んじ玉ふ事肝要なり、富貴を慕ひ、貧賤を厭ふも、止むを得ぬ人情なれば、萬々一も他を羨み、不足を抱かるゝ意念、毛厘も心の底に存在せしめば、御身終身禍の根となりて、受得られたる氣數の福分を失はるゝ事、恐れおもひ玉ふべき事ぞかし、たゞ其有生のはじめに、受得られたる氣數を守り、我身の程を知り、謹愼の心弛ばず、身を修め行を琢きたまひなば、それが則福となりて、終身安樂

に、受得られたる氣數の福分を取失はれず、行末めでたく、子孫繁榮有るべき事疑なければ、此分に安んずるといふ事、常に心に存し、守り給ふ樣にあらまほしきなり、

（未完）

いにしへの養生方

大口多比之

いにしへの養生方は、いまの養生方に及ばざること論なし、されど、いまの養生方は、舶來の養生方なり、わが國人に適せざるところあらむもはかるべからず、いにしへの養生方は、わが國固有の養生方なり、わが國人に適するところおほからんもしるべからず、されば、いにしへの養生方をしらべみるも、さのみいたづらごとにはあらざるべし、このごろ簾中抄にのせたる養生方をみるに、あやしういぶかしきふしもまじれゝど、いまの養生方にかなへるところおほく、またいまの養生方にはいはずして、なか〳〵にさもとおもはるゝところもすくなからず、かつそのかきざまも、いたく古雅にしておもしろければ、ぬきいでゝこゝにものして、いさゝか讀者の參考にそなふべし、かたはらに文字をひきあてたるは、みやすからむがためなり、その養生方の適否いかむをあげつらはむは、おのづからそのみちの人あるべし、

因に記す、簾中抄は、拾芥抄をかなにてかけるやうなる古書なり、三井寺の智證大師よりの傳なりといへり、資隆卿、八條宮へ進らせられし書なり、と群書一覽にみゆ、

養生

かくふるまへば、病無く、いのちながし、人はいたくやすらかなるべからず、つねに物をすべし、又いさゝくるしくは思ふべからず、いづれもあし、つねに鏡をみよ、たゞしかたちをあいすべからず、あつきをりありきをして、水にむかふべからず、おはきにあせあえたらバ、身にはうにをぬるべし、あせにぬれたらむきぬをバ、とくきかへよ、あしにあせあえたらば、水になさしいれそ、冬はあしをあたゝかにして、かしらをすゞしくすべし、春秋はかしらもともにすゞしくすべし、大便少便にはねうずべからず、春夏はおそくねてとくおくべし、秋はとくねてとくおきよ、冬はとくねておそくおくべし、とくおくといふとも、とりのなかざらむさきにおくべからず、おそしといふとも、日いでゝのちまでねべからず、つねに右をしたにて、右のひざをひきかゞめてねべし、のけざまにさしのべてはねまじ、ひるねをこのむべからず、夜ねてかしらに物をかづくべからず、まくらがみにすびつをおくべからず、ね所にみゝにあたりて、あなあらすべからず、つめたき水にて、めあらひそ、つとめおくるまゝにめあらはず、とほく物をバいたくみるべからず、月日をまもるべからず、日入りてのち、又月にあたりてふみをよまず、けぶりにつねにあたれバ、めくらし、あかにもくまのあぶら、ゐのあぶらをともして、そのけぶりにあたるべからず、なましくして五しんをくひて、あつき物をくはず、かしらより

ちをおほくあやさず、いふくなみだをいださず、四十よりのちは、つねにめをいさくまじ、くしおほくしてかみをけづるべし、つとめて物くひ手あらひてのち、かしらはけづるべし、あらひもすべし、つねにてをもちてかしらをなでゝ、あたゝまるほどにすれば、しらがにならず、正月寅日しらがをやくべし、大かたとらうまの日やけばよし、物くひてのちうがひをあまたゝびすれば、はおちず、くちかうばし、夜ありかんには、はをたゝくべし、あしき物めみいれぬなり、とらの日手のつめをきり、うしの日あしのつめをきるべし、大かたうしとらの日ごとに、足手のつめをきればよし、五月五日ゆにらんときくとを入て、ひつトの時にあむべし、菊をつねにゆに入てあむれば、命ながし、春はさくのなへ、夏はくき、秋は花、冬は根をいれよ、陰日にあむべし、乙丁巳辛癸、

（未完）

屋代弘賢ぬしが其の妻に與へられし文

井上頼文寄送

妻をむかへ候ふことは、なにぞといへば、先祖を大切に思ひ、父母に孝行すべき爲め、次には、子孫相續のためなり。我等事、母様御一人御座なされ候ふゆゑ、朝暮大切に柔和に、御介抱申しくれられ候ふこと、專一に候ふ。すべて、男は外のつとめを大切にし、女は家内のこと、萬事油斷なく、取りあつかひ候ふ事、第一に候ふ。

さて、孝行と申すは、有福にて物品不足なきをいふのみにあらず、貧窮にて不足がちなる中にも、何がな御心をなぐさめ候ふ様に、明暮こゝろがけ、かりそめの事にも、思召にそむき申さぬやうに、いたし度ことにて候ふ。かやうに口にはいひても、身には夫程は及び申さず候ふ。我等心づき申さず候ふこと、幾たびも心をそへ、異見をもしくれ候へかし。

女はすべて他人の家に行くものなれば、しうとは實の親もおなじきことなれども、とかく世間には、妻をむかへたる上にて、其の妻の心にひいきいたし、おやにまでそむき候ふたぐひもこれあり候ふは、心ならぬことゆゑ、我等ことは、そなたの心づきにて、一段と御きげんにそむかぬやうに、たのみいり候ふ。

又ひとたび縁をむすび候ひては、一生とゆゑなく、そひとげ申すべきこと、本望にて候ふ。

聖人の教へに、妻の身持あしきは去るべきよし、仰せおかれ候ふ、七つの品あり。

一父母に不孝なればさる
一子なければさる
一淫らんなればさる
一しつとの心あればさる
一あしき病あればさる
一言葉おほければさる
一ぬすみすればさる

かく定めおかれ候へども、子なきとあしき病の二箇條は、子細あることなり。

すべて、我等心底に應せざる身持をいたされ候へば、それまでの緣と覺悟いたし申すべくあひだ、隨分と精出し、萬端世話いたしくれられ候ふやうに、たのみいり候ふ。

是れらの趣きは、まをすまでもなく候へども、たがひに隔心ありては、不和の基ゆゑ、思ふまゝのことを、かねて申しいれ候ふなり。

戀歌は詠むべからずといふ說を讀みて

奎堂散史

女鑑第二十一號に揭載せられたる、林甕臣翁の、戀歌は詠むべからず、と題する一篇は、予の最も同感する所なり、學校の敎科書に、源氏物語を用ゐて、淫靡柔懦の醜文を講誦せしめ、同じく課題に、戀の題を與へて歌よましむるが如きは、實に少壯男女の德性を汚し、心術を破る、此より甚しきはなく、延て國家の風敎を破り、道德を紊るの害、擧げて言ふべからざるものあるなり、(獨り學校のみにあらず、家庭に於ても亦然り、)是れ予輩の恒に慨歎措く能はざる所にして、每に和文學家の注意を促さんと欲するや久矣、然るに今林翁の快論あり、林翁もと和文學家なり、而して此の論ある、以て其の見識、遠く時流の上に出づることを知るべし、豈仰崇せざるべけんや、予は今茲に聊か同感を表すると與に、松平信綱朝臣の室板倉氏の確言を抄錄して、以て林翁の說を讀む人の參考に供ふべし、

板倉氏は周防守重宗朝臣の女にして、松平氏に嫁し、賢明の稱ありし人なり、信綱朝臣は徳川氏の世臣にして、三代將軍家の時閣老となり、土井、阿部等の人々と、與に萬機の料理して、明智活達を以て、時に稱せられし事は、歴史に詳なれバ、今更にいはず、此人にして此の室あり、其の内助の力、蓋し淺鮮ならざるべし、此の一章は、松平家累世の行狀かきたる、おつめ草、と題する書中に載せたるものにして、文章は拙なけれども、原のまゝ一字を加删せず、抄録す、

龍泉夫人（板倉氏法號龍泉院）御歌能くよませられ候。遂に戀の歌を遊バされず。御傍の女中伺ひけるに。歌は人々の取傳へて見るものなり。おと／＼にて。戀歌は。其心のつたなきことも相見るまゝ。よまぬ方まされり。且つ歌の家にてもなく。慰のみの事なれバ。雪ならバ雪。花ならバ花。にて事たり候と。御意の由。

寒紅梅　　中村花痩

其十四

昨日の夕暮は死ねよと泣きし烏に今朝は喜ばれて、夢路を辿るごとき勝は、魂魄先程歸り行きし駕籠に殘したるごとく、何處より何處を傳ひ來しか、現なき足に歩み

たれば、今立つ處は何といふ道なるか、後脊を見れど城の影はなくて、前には限に包まれたる藁家の、畫にも書かれぬが二軒ほど立ちたり。畔路の眞中に立ちて、左か右か、前か後か、と心は一つ道四辻に思ひ亂るゝに、さながら命掛けて欲しきものいろ〳〵と前へ並べられて、好なを取れと云はれたらん如し、斯のやうに迷ひたるときは、得て狐狸に遊ばるゝものと思へば、心齊然と落附きて、我れながら恐まし、足の踏み迷ふは道理、籠出た鳥の放し鳥、我が行かん先はまだ極らぬにてありけり。

扨何處にせんものもと手を重ねて載する杖を思案の柱にして、眼を閉づる勝が前へ、田舍家の軒下より二人の武士瓢然と出で來つ、勝を中に圍んで左右に立ちぬ。扨ハ夫人の御仁慈、朝露と共に脆くも消えて、早や城より追手の人此處に待網の、我は再び籠の小鳥か。と悸然として一と足下るを、彼の武士叮嚀に會釋して、二葉御かと問ふ。勝は否と云はんとする口を押へ、仇討までしたる身が、詐かりて一と時を逃がれんとするは、初めありて終りのなき比怯の擧動と思ひ直し、妾は勝なるが、其許達は。と笠に手を掛けて故意に我が顔面を拜ませ、動かぬ格期を見するに、彼

の武士氣にも留めぬ素振りして、我等は齋藤譜代の武士、夫人に頼まれ奉りて、和女の此處に來給ふを夜の中より待ちたり、先途見屆けよとある御仰言承はれば、いざ落足の案内。と災害と思ひしは皆幸福と降り變る仁慈重くて、勝は思はず首垂るれば、下には春の恩惠に洩れぬ菫の露に濡れたるが、同じやうに小首傾けぬ。ある時は縱に挿まれ、或るときは横に並び、倦きる野中へ來ては慰められ、人の往來あるときは離れて他處ながら護られ、穿物の緒を踏み切るも手に土を附けず、笠の紐解けて落ちても足さへ屈めぬまで心切にせられて、落人の身の護身刀の柄握りしてともなく、踵の豆一つを旅の恙にて、德には風も靡く小流跨げば、三河岡崎の城下と書く、傍示杭の字をぞ讀みける。

城の天主を遙かに指さして、送り來し武士は互ひに顏見合せて勝を小陰に招き、美濃より送り來ていざと云ふ間際に捨てゝは、情に疎き人と思はるべく、我等も佛造りて魂魄入れぬ氣のするあり。あれ見給へ、あの天主は德川殿の居城なり。德川殿は戰國に又と有るまじき仁者なれば、敵國の武士なりと捕へて、無殘と首は刎ねられまじきも、互ひに肱を張る武士道の表面、間諜者と誤まられて縄にとも掛けられ

ては、濃洲の武士三河の境に草鞋踏み込みて、捕へられたりと人の口喧ましく、我が殿の耻辱この上もなし。また城中へ送り込みて、御身の無事に隱蔽はるゝやうに頼むは容易けれど、款狀も通せぬ敵の城へ入りて、仰言もなき私事の爲めに、我が殿へ奉りたるこの首は下げ難し、と嘆息して口を閉づるを、殘餘は今一人が引き取りて、さも氣の毒げに、三河は尾州と舅舅の間なれば、この事の尾州へ白地にありたりとて、勝が身の上には及ぶまじ、その上ならず三河の殿は聞ゆる仁者なるに、罕にもなき女子と必ずや大切にせらるべし、これを除きては外に頼むべき國なし、三河へ送れよと夫人仰せられたり。さるによりて此處迄は送りたれど、今此の仁の云ふ如く、頼めと仰せられねば、此の先如何とも詮方なし、女の身の獨りはおたれて心細きは知らぬにあらねど、獨り放たねばならぬ譯は右の如し。これよりは一人して事を計り給へ、さりとて手蔓なしと此處を離るゝはよろしからず、如何にぞも計り謀りて、德川殿に隱蔽はれ、夢夫人が斯く迄の御心、反古にせぬこそ望ましけれ。

歸らぬと知つて流るゝ水の御情、御情は御情と落ち嵩まりて、聞くたびに見るたび

に、今はしも限りある大海となりぬ、と勝は杖を捨てゝ地の上に跪づき、涙のみ多くて言辭の少なきは、誠意の極まりと覺え給へ。夫人の御心確かに胸へ刻みて、其許等が注意も無にはせまじ、たとへ如何なる事のありとも、三河の境一と足も踏み出さじと云へバ、それ聞けバ最早用なし、一と時も早く歸りて、夫人の御胸落ち附け參らせん、さらばと腰の物の緩みを直して、二人の武士は勝と蛤の二た身に別れ行きけり。

今は呉竹の杖一もとを案内にして、城下彼方此方と歩行き廻り、逞ましげなる棟木を、太やかなる大黒柱の支へたる一軒の宿屋を見掛けて、此家こそと笠を脫ぐ勝を、亭主頭より足の爪先まで特と見て、店の端まで駈け出し、叱らでもよき下婢を叱りて、洗足の水忽ちに湯とぞ替りける。此方へと招ずるまゝに、勝は一段と飾り立てし奥坐敷へ通り、草臥たる腿を摩りて居れば、敷居越しに亭主罷り出で、よくこそのお泊り、有り難く御禮申と稽首くを、勝此家へと招き、早速ながら其許に少と折入つて賴みあり、御城の武士の中に、懇ろにする方樣を其許は持たぬかと問へバ、私祖父の代より數十年この岡崎に住ひて、當時の殿竹千代君と仰せられし昔より、


應需 永洗



淺からぬ御恩を蒙る家柄とて、隨つて御城中にも知巳の御武家多く持ちたり、高とからぬ小鼻動かす。

人懐かしき孤獨の身とて、勝は頼もしく思へバ自然と言辭も低く、殿へ切に願ひ申したきことのありて、女子の身の只獨り、京より遙々と下りぬ。御仁慈深き殿、多分れ妾が願望屆くべしと思へど、直願は恐れ多し、誰人にもあれ其許が知りし御武士の中、意路悪るからぬ人を見立て、斯くの如き女子の、何か樣子ありげなる願ひありと申すよし訴へて、その方樣を連れて來て吳れかし、委細はその折りその人に遇うて話すべし、頼むといふはこのことゝいふを、二つの手に左右の膝頭押へ、首を傾けて聞き居たる亭主、身を退つて平蜘蛛の如く、御無禮ながら、樔門へ立たせ給ひし時より、御褄外れ只ならず、京の由緒ある御生れとは、多年の客商賣馴れし眼に見て置き候。殿に御馴染の方樣、御直願の筋の奥は、仰せられずとも略は、と頬に手を當てゝへゝゝゝゝと笑ひ、三河の御領主が、御愛妾の一人や二人。決してゝゝ氣遣はせ給ふな、日頃御恩を蒙りて疎からぬ間の、それはゝゝお情け深き御仁をお連れ申し、容易く御城中へ御輿入れさせ申すべし、野夫にも一と件の功

と思召して、この後はよしなに。と己が勝手に考へて、打つ槌を外さぬつもりの推量、勝は少し呆れて答へぬを、左もこそと云ひ當てた顏して獨り喋り散らし、後下りに敷居越して、閉てる襖は優やかなれど、疊に騒ぐ足音は驅けりてぞ行くならし。入れ替つてこの家の娘が、目八分に捧げて持ち來る折敷の菓子、これを緣にして、首尾よくお部屋さまと尊められしときは、手元に遣うて呉れと云ふ隱語か、此方よりその方の心見え透くあり。續いて四十恰好の女、妻と名乘りて新らしき茶に花香を持たせ、計らず御宿を仰せ付けられてといふより初め、京からの路筋の善惡、時がらとて戰爭の咄、殿が功名の自慢など話して、長旅のお疲勞、御足など揉み申さん。と折角の愛想諂諛に落ちんとするとき、亭主額際の汗を拭きながら襖を開け、曉くなりて定めてお待久しうといふ後より、分別ありげなる一人の武士、大刀左手に提げてずいと座敷に通り、不思議さうに勝が顏を睨みて、客坐に腰を据ゑ、德川家康が家臣大須賀五郎左衞門、初めて御意得申すと名乘る。

勝は疊一枚ばかりを避けて下坐に退り、突く手の甲に反りを見せて、まだ御面影も晝の月影の其許に、名乘る初郭公の妾れ、勝と呼ぶ氏もあき賤女、御閑暇もあき折

から、勝手がましくも御足を願ひませゑ譯は。と亭主の方に流眄して五郎左衛門の顔に眼を移し、少と密々に願ひ申したきことありてと辭儀するを、大須賀それと曉りて、功名顔に端坐まる亭主に向ひ、彼方へと鶴の一と聲、退れと腮の指圖。勝と大須賀がさし向ひの密談、如何になりしかと亭主店に坐りて、撥きては崩す算盤の間隙の胸算用、二一天作の五さらりと割るれば、折も折奥の間に掌を打つ音す。見徳よしと亭主人を掻き退けて自身飛び出したるが、やがて小走りに驅けて來て、扨こそ／＼我が推量通り、大事の御方、町家の人出入り繁き處には置き難し、乘物の用意せよ、兎も角も我が邸宅まで供する。と大須賀さまの仰言、これ嬶、明日は御城から御呼び出しの御褒賞頂戴、ゑゝ永樂錢の顔は、何程見ても飽き足らぬ者ぞ。

文林

谷紅葉　　近衛忠熙

奥山の木ずゑのあきもしられけり
もみぢながるゝ谷かはのみづ

田家鹿　　東久世通禧

山田もるかりほのいほの月ふけて
あきかせさむく小鹿なくなり

閑窓賞月　岡部譲

窓の內はさはるうき世の塵もなし
つきにはとめるわがいほり哉

觀菊會　植松有經

みそのふの菊の花にもおとらぬは
粧へるきぬのいろめありけり

愛菊　谷勤

おほしたてんことこそしらね菊花
愛づるこゝろは人におくれず

垣菊　大口鯛二

あさがほのつるとりすてし竹垣に
菊のはつはなみいでつるかな

草庵月　藤井行麿

眞柴たくすゝのしのやは燻し火も

さゝでことたる秋の夜のつき

岡佛尼　有住齊

はらからのせめぐ中垣たちいでゝ
月かげあふぐかまくらのやま

山內一豐夫人　佐々豐水

馬の代さもあらばあれ夫につくす
あかきこゝろの奥のふかさは

山家水　千種任子

汲人のまれなるやまのこけしみづ
なつも落葉のたえぬなりけり

鳩　小倉文子

今日も又雨やよぶらむくぬぎはら
むらくも立ちてやま鳩のなく

深夜神樂　園祥子

ものゝとは静まりはてゝ更る夜に
高くきこゆるみかぐらのこゑ

述懐非一　　小池　道子

うつせみのうき世の中のおもひ草
枯るれバやがておひ代りつゝ

初雁　　三輪田眞佐子

むさし野の雲井はるかに影みえて
尾花におつるかりのひとつら

閑庭紅葉　　松浦辰男

我が宿の庭のもみぢは　秋毎に染めてはちれども
染むと云て愛る人なし　ちると云て惜む人なし
我が宿の庭のもみぢは　ぬバ玉のよるの錦か
あかねさすひるの盛か　光なき谷ふところに
あらねども惜をとめて　問ふ人もなし

月を見てよめる長歌　　深見春明

月といふつきの中にも　この月とむかしの人の
たゝへつゝ仰ぎし月ゆ　いざや疾愛ましものと
思ふどちいより集ひて　ゆふ庭に小莚のばへ
菽薄小がめにいれて　影やどすたむけを捧げ
年毎のいへのためしと　手すさびのもちの數々
野に生る芋のかずかず　うつたかく器にもりて
月よみの神のみまへと　畏くもさゝげまつらひ
楽しけく月まちをれバ　山のはに影ぞほのめく
あなたのしあな面白と　己がじゝ謳ひさゞめき

眺めつゝ酒くむからに　すらくと昇る景色は
言もえず名付もしらに　心ゆくながめありけり
世間のいかなるうさも　くもりたる心のそこも
速にすみてこそわたれ　こゝ見れバ昔を今に
たゝへつる今宵の月に　ます月いおし

反歌

心なきさとのわらべもさやけしと　いひはやすまで月すみにけり

日誌の序

女子高等師範學校　田中正尾

したしき友と端居して、はだへすゞしき夕風に、ひるのあつさも、なごりあらうなりにたれば、そこにある文どもを、われも人もよみあそびするに、友いおのが日記をふと見いで、うちゑみて、何の爲ぞと問ふ。答へず。又とふ。己笑ひて、そこにあやしまるゝこゝろは、われよく知れり。されど、試におもひたまへ。人の記臆は限りあるべし。言だまのさきはふ皇國とはいへ、日に月にことわざしげき世の中に、過ぎこしさまを、いかでいひつぎかたりつたふることを得べき。されば、わが日記するも、ほどへて後、おもひ出でん料にせまし。はた何くれにつけて、のちの人のかうがへを助くる、かたはしにもせまほしと思へバあり。古の人いはずや。三人行けバ、必わが師ありと。これは、まのあたりの事あれど、古きあとゝて、などかこのことわりに外ならん。わが父なりける人は、いとけなかりし頃より、文かくとを好みたま

ひて、何となく。日々の事ども、かきつけたまへるがつもりて、くしげにみてり。今とりいでゝ見るに、珍しき事どもすくなからず。おのがふみよむことを好むも、これによりてぞかし。はた其の世のさまなど知れるも、もはらこのたまものぞかし。さるを、むげに益なしとのみ、ないひくだしたまひそといふに、友うなづきて、いらへせず。打しも雲間をもれて、さし入る月に、かたへにおけるけづりひ、さやかに見えぬ。いつのほど、もてこしにかと、あやしみおもふもをかし。へだてなきかたらひに、いたう夜ふけぬ。友も今はとて、庭に下りたち、かへりみて、きみにならひて、あすよりは日記といふことをすべし。されど、序のなからんは、あかぬこゝちすべきを、今日のものがたりを、そのまゝにせばやとおもふは如何にといふ。己よろこびて、とく思ひたちたまへかし。いはるゝ如く、かりそめのものにも、序なきは、物たらはぬ心地ぞせらるゝ。われもまた、君にならひて、けふのさまを、あすとくといひてわかれしは、明治はたとせあまり五年の、みな月はつかの事ありき。そもつたなきあとをとゞめんことの、はづかしさよ。

幼稚園の記

佐藤數子

大空におよびさして、月の御としを、いくつととひ、雁がねをみて、あとのが先にたつをいましむる、はかなごとは、ちごをかしづくそうなの、さ

だまれるをしへなり。いときなきより、貴きは貴きを友とし、いやしきは賤しきを友として、ひろく交はり、遠くさとりをふかむるをしへは、さらに無かりしを、明らけく治まれる大み世の九のとせに、幼稚園と云ふ一つの學室を、東の都に開かれてより、やごとなき人の子はさら也。いやしきゐのわらはべも、一ッむしろにつらなりて、かたみに、まじはりと云ふことを知らしむる習ひとす。されば、朝まだきに、めのとにいだかれ、雑仕女に手たづさはり、あるは手車にたすけられて、きよりつどへるが、やがて、きひわある手を打ちたたきつゝ、まはらぬ舌に、すゞめ〳〵とうたひ出で、物のねにつれて、足ふみしたるは、いかなる黒塚の老婆も角をれて、佛心になりぬべしゝし。

又五色の糸して、色の名をとひたるに、白きを黒しといひ、赤きを青しとこたへしも、終にはいひあてゝ、いとはてりがなるさまなど、いとくらうたし。くみ板に物かたをつくらしめ、針もて太草の花を繪がゝせなど、さま〴〵にて、よいひのまさりおとりを、わいだめしたる、敎師の手でゝろ、をさあげにみえて、中〳〵にたくみ也。只ここに一ことのくりごとあり。保母と云ふをみれば、花ならば盛にいたらず。月ならばいざよひのよはひあるがありて、其才いたりつくせるも、かゝる場には、ふさはしからず。我がなしゝ子の生立を知り得たる、三そぢ四そぢの、さた過ぎたる女ならましかはと、ゆくりなく、思はるゝなん、世なれぬひなび心か。はた、

姫島日記第二（承前）

故 野村望東子

廿五日、題をまうけて、二十五詠のうち、

禁中梅枝

梅の花いぶせきねやにをられきて
　むせぶばかりもくゆるなる哉

梅の花わがみしろきにかをそへて
　しひても人をはるめかすらし

さしこめて固きとばりの中にても
　ひらきなづまぬ瓶のうめかな

雨中山

打ちむかふ心もくらしかゝみやま
　としさへくれの雨にくもりて

波上山

見るたびに波のたちゐも山〳〵の
　けしきも同し時なかりけり

おにやらひ

おのづから心にすむはやらひても
　よを立ならす鬼はさけあへず

立春

春立ときけどめづらし身をわびて
　過ぐる月日の外ならねども

いたく冴ゆる日に、古郷より、衣ども送りおこせたれば、

まだきよりけふの寒さをいへ人の
　心のうらにかけてこしきぬ

かばかりにて、文も越せねば、

ことづては何となけれどふる衣
　ふる郷人のそでの香ぞする

今までは、軒の庇がくれにのみ、すぎ來し月の、わりわけがたになりて、はじめてさし入たれば、

疎くへし人やの窓にいつよりか
　かはさしむけて有明のつき

燈火のあるにはこりて家にては
　うとくも過ぎし冬の夜の月

われのみや向ふと月も向ふらん
　年さへ深きよはのしはぢに

惜げなきうき年月のいてながら
　あはれなごりは有明のつき

春まつこゝろを、

しるしなく花にも疎く過ぎぬ共
　さすがにはるはまつ心かな

いそな、

はる立ちて磯なもちかく生れ共
　摘れぬ人やみをのみぞつむ

うきたけの谷〴〵に、すら立ちて雪のふりたるを、

行く年を神に祝ひてうきたけの
　谷にかけたる雪のしらゆふ

年はつる日、かた〴〵より心〴〵に、物など調して、祝ひおこせたれば、さすがに憂き囚もたゞならで、いへ人どもが、いかに思ひやるらんかし、

浦人のなさけありその年なみを
　こえぬと家にしらせてしかな

流れこしうきみ忘れて向へてん
　いづこもみよの春ぞと思へば

（第二の巻をはり）

雜報

●天長節　去る三日は、掛卷も畏き、我が　天皇陛下の生れまし丶吉辰にて、都も鄙も押なべて、大御代の萬千秋に榮えさせ給はむとを、祝ひ奉らざるはなかりしなるべし。まして、官公私立學校の生徒は、男も女も打ち揃ひて、御聖影を拜し奉り、勅語を捧讀し、「君が代」の唱歌をうたひて、聖壽の變はらせ給はざること、天の長に久しきが如くならんことを祈り奉りしなるべし。女鑑購讀の姉妹等も、學に從ひ給へるは學校に、家に事こり給へるは座敷に、父子夫婦兄弟姉妹一家團欒して、皆々祝ひ祈り給ひしこと、彼の生徒の如くなりしあるべし。此の吉辰に當りて、よそに打ち過ぎんは、臣民の道に非ざるを以て、我が同胞の姉妹等には、必さる人のあらざりしは、斷じて疑いざる所あり。あはれ、四方の姉妹等よ。此の吉辰を祝ひ奉りしが如く、四時祝祭の日には、一家打ち舉りて座敷に集ひ、脩身道德の話、或は古來貞女烈婦の物語などして、歡樂の間に、其の日を終へ給ひてよ。

●勅語　一昨年十月三十日に下し給ひし教育の勅語は、學校に於いて、ともある時には、必捧讀して、聖旨を奉戴する念を喚起すること丶な

れども、其の他に於いては、絶えてさることと無きが如し、惟ふに姉妹等の家にも、さることなきにもあるならんか。これ大なる誤なり。彼の勅語は、唯に學校のみの爲に下し給ひしものに非ず。臣民一般に奉戴すべき、聖旨を示し給ひたるものなれバ、家々に於いても、祝祭日は云ふも更なり。祝すべき事ある時には、必之れを捧讀し、又其の意義を說話して、奴婢に至る迄も、常に服膺して忘れざる樣にすべきなり。又此の　勅語は、丁寧に書寫し、額に作り、床の間の正面に掲げおくをよしとす。女鑑購讀の姉妹等は、既に此の如くし給ふらんなれども、又未心付かずして、打ち過ぎ給ふ人もあるべければ、天長節を祝ふ序にかくなん。

●人はかくこそ　維新前には、勤王の志勃興して、幕府の毒刄にかゝり、命を捨てたるもの、幾許なるを知らず。其の頃勤王の士に、兒嶋草臣と云ふ人あり。東奔西走して、勤王の說を唱導せしが、後遂に國家の爲に斃れたり。其の母の歌に曰はく、

梓弓岩をもとほす心してますらたけをのおもひたゆむな

敷しまの道はひとつを女なりとてなにおとるべき大和魂」其の妻光子の歌に曰はく、

たえて世に望なき身は天皇に君がつかへんとをのみこそ

なにごとも何か女ゝしくたゆたはんますらたけをの妻となる身は

母と云ひ妻と云ひ、此の如し。子たり夫たるもの、いかでか勤王の志、勃々として興起せざらん。草臣勤王の爲に、遂に斃る。豈宜ならずや。凡べて女子は、温和柔順を以て徳とす。されども、一朝事ある日に望みては、將に此の草臣の母妻の如くあらざるべからず。

●手ならひ　書は姓名を記すに足るといひけむは、亂れたりし世の人言なり。安らけき今の大御世に生まれいでし人の言ふべきことにはあらずかし。さるを、今の世の人の中にも、或は巳が手の惡しきを掩はむが爲にや。或は手習ふことを物うしと思へるにや。ことさらに古の英雄をきどりつゝ、かゝることをいひいで、自あざむき、人をもまよはせむとする者あり。事しげき男子の身ならましかば、實に巳むを得ざることの、なきにしもあらざらめど、女子としては、誰も〳〵、手は善く書かまほしきものになむ。さるは、歌にても、文にても、そのかきぶりの、金釘の折れたるが如く、又、ひよきとやらむものゝ行列たるが如くならむには、その歌文のいとうるはしく作られたるものすら、先、見おとりせらるゝが上に、人がら心ざまに至るまで、いと卑しく思ひなさるゝなり。さては、手習ふわざも亦、女子の必修めつべき藝道なるべし。

●菊の花見　秋もやう〳〵老いて、今は早、一年のとぢめの花の咲きいづる時とはなりぬ。名に負ふ團子坂の造菊も、眞盛ならまし。記者等は、入りたてる筆の林の事しげきまゝ、いまだ杖ひか

む暇もあらねど、京に居給へる姫等には、或は父母に伴はれ、或は親戚に誘はれ、或は同じ學びの友どち引き連れて、物し給ひしも多かりぬべし。そも、この菊は、花のさまのうるはしく清らなるは更にも言はず。香をりさへ、いとけだかくなつかしきに、善く露霜に堪へて、行く末久しく榮え行きつゝ、長き世のためしにひかれ、變はらぬ節操になずらへらるゝは、他に比ふべきものもあらずなむ。あはれこの花見給ふ姫たちよ。ことしの花の見をさめなれば、目枯れせず見給ふべきは更にもいはねど、必、こゝろなしにな見すぐし給ひそよ。

兼題

十一月廿日
歌題……初霜
文題……埋火の詞

十二月五日
歌題……寄松祝
文題……貞烈の說

十二月廿日
歌題……學者惜年
文題……雪朝眺望

餘芳

みくるまのあと（つゞき）

かへらせたまひて後、この庭の、南おもてにて、大和萬歳つかうまつる。宮は、樓のおましより御覽ず。ゐなか人の裝束して、ねりいでたるさま、まづをかし。まへに四人、うしろに、つゞみもたるもの、おなじさまにて二人、すべて六人なり。あやしく、ふるめいたることゞも、うたひて、後には四人にて、うたひつ、まひつ、狂言のやうなることをす。東京にみる、三河萬歳とは、やうかはりて、やゝ古雅なり。これがをはれば、伊勢神樂とて、しゝまひ、つかうまつる。東京の、太神樂といふものに似て、ものゝしらべ、少しゆるらかなり。これも、ふるめいたるものなり。しゝまひはてゝ、さま〴〵のわざ、つかうまつる。かるわざなど、よくれんして、みどころあり。ことはてゝ、ゆふべのおもの奉る。又、夜にいりて、さらに、たきゞ能といふこともあり。庭の東おもてに、かゞり火たきて、芝生のうへにて、つかうまつる。このさとの、ふるきならはしなりとぞ。はかなきわざも、きさいの

宮に、御覽せさせむとて、とり〴〵に、おもひまうけたる、こゝろざしは、さすがに、あはれとおぼすらんかし。

廿日、小雨をり〳〵ふる。六時三十分に、いでたゝせたまふ。みとも例の如し。猿澤のいけの、ほとりをすぎて、奈良の町をはなるれば、めをとバしといふはしあり。そこより野道にて、けしきよし。いこまやまも、右のかたに、やゝ、うしろさまになりてみゆ。うちわたす田のもの菜の花も、おほかた、みにありたり。春もふけたるなるべし。飯合川のはしをわたれバ、帶解村あり。戸數百五十バかりありとぞ。村なかに川あり。地藏院川といふ。これをすぎて、櫟本村、字藏の莊にいたる。莊のなからばかりに、はたいせん川の大橋あり。わたりゆけば、字楢村といふ。楢大明神の社あり。すべて、このわたり櫟本村なり。戸數六百ばかりといふ。道の左に、人丸の祠あり。警察署、郵便支局などありて、よき町なり。町はづれに、在原神社あり。これまでのあひだ、葛城、右にみゆ。むかひにみゆるは、多武峰なり。卷向の檜原、弓槻嶽など、やゝ近くなりて、けしきよし。森、石上、田部、河原城などいふ村々をへて、丹波市にいたる。道の左に、官幣大社石上神社の建石あり。こゝに

も、青葉もてかざれる門に、木の實、花などにて、龍のむかひあひたるかた、つくりたり。町なかに、青石川あり。これをわたりて、御小休所、中山平八郎の家に、つかせたまひしは、七時四十分なり。しばらくありて、こゝをたゝせたまひ、三昧田をすぎて、成願寺村、新泉村にいる。右の方に、官幣大社大和神社の鳥居あり。とこに、神づかさいで、みくるま迎へ奉る。これより岸田市場をすぎて、柳本なり。戸數三百ばかりといふ。郵便支局などあり。野道にいづれば、左のかたに、引手山みゆ。少し行ば、崇神天皇、景行天皇の御陵のしるしの札あり。これより卷向村、字辻といふところにいる。左のかたに、穴師神社あり。織田村、字芝といふ町の入口に、北口川ばしあり。戸數二百ばかりあり。又野道にいづれば、多武峰の谷々、まむかひに、いと木ぶかくみゆ。馬場崎をすぎて、三輪大神々社教會所にて、いこはせたまふ。おましどころも、いときよし。黄なるつゝじに、白き藤の花の大きなるを、かめにさしたる、いとめづらし。これより、三輪の本社へまゐらせたまふ。五丁ばかりあり。かねて、みさだめの外なれば、神づかさ、あわてまどひて、案内し奉る。にはかのおぼしよりにて、ことに神づかさも、ありがたく、おぼゆけんかし。

三輪の山きみをまちえてとしをへし杉のしるしはけふぞみえける」など、おもふほどに、たゝせたまふ。このさとは、警察署、郵便支局などありて、ことににぎはしきも、ひとへに、大神のみいづに、よれるなるべし。

（つゞく）

敎の庭

十一月五日兼題　時雨

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天

をしと思ふ秋に別れし袖よりや
時雨のあめはふりそめにけん　松田　靜枝

地

明日よりは錦きるらん唐ごろも
たつたの山にしぐれ降るみゆ　沖田みさを

人

晴るゝかとみれバ曇りて定なく
ふるや時雨のさだめなるらん　大槻　季夫

山風にむらたつ雲のゆきかふは
もみぢをそむる時雨なるらん　狩野　秀

はるゝかとみえて又降武藏野の
空さだめなきゆふしぐれかな　和田ちか子

山里はことしも冬のはじめぞと
しぐれて袖はぬれそめにけり　水上千代子

音づれて古き軒端をとふものは
ふゆをつげくる時雨なりけり　山口　明子

時雨せしあとにも空の曇れるは
また降り頻るしるしなるらん　稻田はるえ

けふもまた終日空のはれもせず
降りもさだめぬ村しぐれかな　稻田　その

散り落る木葉に音をまがへつゝ
あらしにきほふ夕しぐれかな　稲田　きみ

山里はいよゝ淋しさまさりけり
おち葉みだれて時雨ふりつゝ　松田　やえ

とくはれし波路は元の日影にて
磯邊のまつにいまぞしぐるゝ　松田　節江

賤の女が門のほし籾とりいれよ
かぜゆふたちて村しぐれふる　橋本　數江

あるははれあるは曇りて吹風の
心のまゝにふるしぐれかな　木村　ふさ

朝霧のはるゝまもなく掻くれて
そでにふりくる村しぐれかな　佐々有鄰子

しもかれてみる影もなき秋草に
冬をしらするむらしぐれかな　松井つる子

大方のこゝろつくしの秋よりも
しぐるゝ冬ぞさびしかりける　青木　燦子

おのづからふむ人もなき片山の
積もる落葉にしぐれふるなり　勝家　貞子

はれ曇り空さだめなく冬の來て
降らぬ日もなきむらしぐれ哉　植木　鋼子

程もなくくれなん年の思はれて
いとゞ身にしむはつ時雨かな　福本　稲子

村時雨ふる事のみを思ひ出でゝ
まづひちそむる我がたもと哉　佐藤　秋子

はれま迚かへさを急ぐ深山路に　髙井　孟子
又そでぬらすむらしぐれかな

はつ時雨ふる程もなくよも山の
木々はちしほに色つきにけり　瀬戸　さと

村雲のはるれば頓て木がらしの
おちばをさそひふる時雨かな　岩下　光子

阿蘇山の嶺にたゞよふむら雲の
やがて時雨るゝ冬はきにけり　宮川　きよ

吹けばふり撓めばやみて雲拂ふ
かぜのまに〳〵ゆく時雨かな　大槻　修

黄昏に迷ふたかねのうきぐもは
たが里にふるしぐれなるらん　島田　悦子

人足のたえしをいとゞ怪しみて
みれば軒端にしぐれふるなり　坂本きむ子

神無月くもりみはれみうき雲の
そらさだめなくふる時雨かな　髙井千代子

ふきまよふ風のまに〳〵凄しく
降そゝぐ高根のしぐれなりけり　渡邊やす子

木の葉かと思ふばかりに山窓を
わけがたすでく時雨きにけり　坂本かず子

定なきよのはかなさを思へとや
しぐれの雨のたえ〴〵にふる　桑原きさ子

木の葉ちる音かみやまの松風か
まどにおとなふ時雨なりけり　山崎くら子

冬ざれば殘る紅葉もうつろひぬ
しぐれの雨のまなくふれゝば　久保田律子

いつしかにみねの紅葉色そへて昨日もけふもしぐれふるあり　青木はる子

大井川なみたちさわぎあらし山おろすあらしの末しぐるなり　松井たまみ

鎖しつる學びの窓にはらはらとこのはおぼえてふる時雨かな　鈴木かつ子

賤が家の軒の板戸におとたてゝさびしさそふる小夜時雨かな　稲田　兼子

栞してあすを契りしもみぢ葉もよはのしぐれにちりや乱れん　稲田　稔子

むら時雨よそには晴れて物思ふ宿ののきばははあれざりけり　田村千代子

四方山の櫨の立木のもみぢ葉もしぐれにいとゞ色やますらん　渡邊　榮子

山里にしぐれふる日の淋しさはよはにもまさる心地こそすれ　渡邊みえ子

神無月しぐるゝ空とありぬればをぐらの山ももみぢしぬらん　猿渡　廉子

降來るも止むも知られてよは乍らまつぞ時雨のたよりありける　金澤よし子

あく虫の涙やそらにかよふらん夜半に時雨のしげくふるなり　中村　友子

浅茅生のとふ人もなき庭の面のをちばの上にしぐれふるなり　川井田さよ

村時雨ふりそめしよりすゞか山みねのもみぢ葉移ろひにけり　楢崎　光子

あけくれに物思ふ身は柴の戸を打つ時雨にもそでぬらしけり　中井　竹子

長き夜の寢覺淋しくしぐるれどわがひとりねの友とおもへば　片岡　久子

うき秋のつゆの袂もかわかぬに濡らしそへたるはつしぐれ哉　師岡須賀子

あかねばや入人にそめし紅葉を今ひとしほとしぐれふるらん　師岡千代子

くれてゆく秋は何處に宿るらん野にも山にもしぐれふるなり　横山きみ子

十一月五日兼題　閑庭冬來

天

八重むぐらとぢはてたりしもいつしかおとろへゆきて庭もまがきも虫の聲さへもかれがれになりあはれうしつらしと云ひわびし秋もくれぬと思へは又かなしくてながめ居たるにさと吹きくる風にちりのこれる木の葉と共に袖にかゝれるは時雨のあめなりけりいと冷なるまゝに指をりて數ふれバ今日なんみ冬たつはじめなりけるされバよと思ふにもさはらざりけりとひとりごたれてなん　師岡須賀子

地

はらはぬ庭はむぐらのみ生ひしげりてこほろぎの　佐々有鄰子

こゑかれ〴〵なるにかきねの菊には霜の花のには
ひをそへかけひの水のこゑはたえ〴〵に軒の栗の
實みつよつふたつ落る音なひ耳にふれてさびし門
のさくらのかへりざき風のゥをりはわかねど片山
さとも冬來し空のけしきみえてものかなしうなん

人　　松井つる子

世におくれがちなる山家も花鶯に春の來ぬるを知
り紅葉雁に秋のおとなふをさとるなどをかしけれ
ど人目も草も枯れはてゝ落葉ふりうづむ我がやど
に道も迷はで來ぬる冬こそことよなうあはれなりけ
れ

交野雄子

この一日二日はこゝちやそこなひけん頭のみいと
重くてたへがたければきぬかつぎてうちふしゝに
けさよりはさうじにさす日かげさへうすらぎて寒
さ身にしむ心地して端山おもてのまどを打開けば
こは雪にて浮世の寂しさを現はす色ある紅葉は散
りはて肥たる林も骨見えて間なく隙なく北山
おろしの朝風は颯々烈しく身にしみ渡るはかりな
り障子の外にたゝずみて故郷に居たりし比川ちか
きり家ゐありしかば空はいとよく晴ねど見わたすか
ぎり玉をしきたらんやうにて水の色もれいならず
さもなき河中の石さへ雪うちかけつるすがたそう
しく岸ある木々は春ならぬに花どまがへどさすが
にたかゝらぬ雪の木ずゑ全くはかくしあへでと賤
の家の昔となりぬなどひとり思ひ答へつ物おもひ
しの中にはしたと打かたらひて庭方雪ふり來ぬと

うれしげに五つにありし妹の息の色しろく見ゆる
内にいそぎつゝくるまゝ筆とりて人々のもとへや
らんとてかくなん

湯淺うの

つれ〴〵なるまゝに立ちいでゝ庭のおもをながむ
れば今年も冬は來りけりきのふの楓はけふの梢に
なごりをとゞめず餌をあざりし地上の蟻はいつし
かに冬ごもりて影もうせ雲間をわたるかりがねは
冴えわたる夜半の月にあはれをとゞめ池はみぎは
に薄氷をむすびて軒端のつらゝは月にかゝやき霜
夜にひゝくをちこちの鐘もいとものすごしさと吹
きくる北風はしぐれか雪かとあやしまれてそゞろ
埋火なつかしくなりぬ

松田靜枝

なつかしかりし秋の夢路の殘る枕を覺すは芭蕉に
はあらで閨の戸たゝく時雨のあめの一しきりさ
ては木がらしに漂よひて水なき空にちり〴〵落つ
る木の葉船あはれ北山おろしに誘はれてやがて雪
ふる冬は來りぬ暦なきこの柴の折戸までも

稲田君子

朝にゝ野邊の千草の花をながめ夕には松間の月
をめでにし秋もはやいづち行きけん今日は木がら
しに木の葉は散り時雨の空の雲の行きかひたゝな
らずたゞ白菊は庭のまがきに咲き殘りたるのみあ
はれ月日も知らぬ我庭もいつしか冬とはなりにけ
んかれ〴〵なるむしのねにあはれをのみぞとゞめ
ける

青木輝子

秋のなごりにとまる紅葉三ひら四ひら千代のかたみに殘る白菊一もと二もとなにとなうあはれなるに今朝おく庭の霜に色みえそめて冬來ぬと思へバえも云はずなつかしうおもはれてなむ

くれて行く秋のなごりの庭の面に
おく霜白し冬やきぬらん

勝家　貞子

荻の葉音もうらさびて虫の聲も絶々となりおのづからとひくる人もなき片山は峰のあらしのあらあらしく堪へがたきまで吹きかよひて小暗う茂りあひたる庭の梢も殘る色なく散りみだれ心地よげに清く流れし遣り水も木の葉にむせびてたど〱しく池のみぎはにちりとゞまれる紅葉の上に霜いとしろうおきなせるはうしとおもひし秋の暮れはてゝいつしか冬たつ空なりけり

植木　鋼子

きのふまで梢に見えし紅葉の夜の間の風にや散りしきけん我住庭は道もなきまで埋もれかけひの水もせかれて音絶ぬかゝる折しも柴の戸に音づるゝは嵐の誘ひきたりしくれにぞ有りけるげに山里は冬ぞ淋しさまさりけるとはいひけんかし今よりは初雪降りしあした跡つけて問こん人こそいとゞゆかしうまたるれ

岩下　光子

紅葉狩茸狩も程すぎて野山のすがたいとさむしきに木枯の風ふきすさび落葉ちりしく籬根の菊は霜にうつろひ前栽の萩尾花露にうらかれて秋の色香もなごりなう日影ながらに時雨ふる庭のけしき哀れいやまさる冬とはなりぬひとり時得顔なる松がえのみどり影さす窓の埋火かきおこし宇治の木のめ煮つゝうちながめやる徒然にうたをしよまん文をしかゝんと何くれとなぐさめられそゞろにまた初雪をまつこゝちのするになん

沖田みさを

昨日まではたゞあはれとのみきゝし松風の今朝はことさら身もさぶく人とはぬ宿もおのづから冬のけしきとはなりぬげに人めもかるゝてふこゝろとこそなりぬれ木々の紅葉はふくかぜにもろくもおち散りておくしもふかく庭のちぐさは色かれてよりどころなげによわりはてたる虫のこゑのいとゞあはれにおぼゆるにまがきの菊のみいとほこりがに三ツ二ツばかりさきもて殘れるはあはれにもたのもしおしなべてさびしさは冬こそまされといひけむもうべなりや

見渡せば山野のくさ木うらかれて
ふくかぜさむく冬は來にけり

宮川きよ

山中無暦日と詠める詩は天離る筑紫のはての後の肥の道のかたほとりなる阿蘇の深山里にはいと切なる詞なり庭の眞砂もよむべく光清き最中の月もいつしか過ぎて長月の秋の末野に機織虫の鳴きつるに心づきて俄かに冬のたつきのいそがしくしてたちぬふ女の手業も心せかるゝまゝにはや此の頃は見し秋の花の千種も霜かれて遠近の山邊のもみぢちりそめて時雨のけしきも何となうことだちていみじう寒さもまさりかつは庭の穂薄うらかれ

がれに雁がねのなく音さびしき冬はいつしかも北山を越てや來つらんとおもふにもかく月日はをこたりなくうつりゆくものを女の身としてつねは心ゆるく何くれとおしすぎて時の來ぬればとてあわたゞしく取り急ぐは盗を捕へてさて繩をものするとひとしく事の用をかくものにして女の本分をしも盡さゞるものなりとひとり心にいましめてかくなん

高井千代子

朝とくおき出でゝ顔あらふ盥に薄氷の結びそめたりけれバ柄杓もてくだかんとするにを指のさきゝらるゝほどにいといたうおぼえぬやがて凍りわたれる井の端のながしといふすべりやすきところを心しつゝ踏しめてくみあげたる水はおもふよりかへりて温かうおもひぬ顔洗ひはてゝ遠近ながめやれば夜のほどにや木枯いたくふきあれけん梢々の木の葉はおほかたちりはてゝ山ハ面やせつ森は骨立ちてあはれに凄まじう見わたされぬこのごろまで賤が心してもてはやせしきちかふ女郎花などのさきつくしたる籬のほとりうちみれバあはれにもいつの間にか霜枯はてゝかなしきながめなるを賤がかくれ家は暦といへるものもなければ花さき鳥うたふいろ音に春をしり金をもとかすてふあつさに夏を知り澄みわたる月天とぶ雁に秋のあはれをしりつゝこゝろなくうつら〱暮せしは夢のやうにおほゆるをうちつけに冬の空とはなりぬあはれむかしの人のよみいでたる人目も草もかれぬと思へバてふうたのうへも思ひいでられて又一入さびしうなん

坂本嘉須子

浮世のちりをのがれてすめる我山里の伏庵はこよみてふものもなにかせむ都とはとなり谷の戸いづる鶯の聲きゝて春くることをしり木立の若葉しげれるを見ては夏をしり鴈のおとづれあるは薄の穂浪うちなびくを見ては秋を知るなど時〱の鳥の音はた草木の色の四つの時にうつりゆくをなかめてやがて心にそれと定むるなどみづからもいとをかしうなん此頃の空にいたりていつしかと閨の戸のひまよりふき入るゝ風の身をさすバかりになりにたれバあやしむといふにはあらねど朝庭におりたちつゝ見ればにしきなしたる紅葉も大方ちりはてこゝかしこに一葉づゝのこりて見ゆるもおのづといろのうすらぎてかきねに生ふる萩すゝきもみながらかれはてしすがたもあはれさむけき冬の來にけらし吹ゝつ風も一入身にしみて大空のけしきもまたすさまじうなむ

青木はる子

昔は何人の住み給ひしにか館も半朽ち落ちてあとは賤が芸ぎる麥生となりぬれど庭のみはいと哀れげに殘れりされどふりはへて訪ひ來る人もなし今は桓根の草も枯れはて面白く泣きたる虫もおのが住家を失ひて土中に入りけんあともなし彼方の隅には紅葉桐葉殘りなく散り亂れていみじくあはれげに見え清くすみたる池も半バ紅葉桐葉にうづもれて形バかりをとゞめ半バ氷にとぢられぬ中央に立てる岩のもとにある萩の葉も露見ぬものから獨

昔思ひ出顔に打ち靡きたるこそ哀れなりけれされど此方の松竹のみはわちこち枝に白く積みし雪にも撓まず青々とおひ茂りて千歳かはらぬ操をあらはし梅もこれ劣らじと明くる春の初めには目出度匂ふ花を咲かんものをと蕾を養ふもいと殊勝なりげに歳月は人を待たずと宜なるかな此の訪ひ來る人もなき主なき庭も冬は來て自然にかはる庭のさまいと哀なり

田村千代子

七くさの花のさかりにも露ばかり音づるゝ人だにもなくしら菊のにほひえあらぬ頭にも獨のみながめくらしつる庭に今はなく虫の聲も霜にかれ柞のもみぢも風にちりすぎていとゞさう〴〵しきやどをもよ所にみなさではやくも冬はたづね來にけり今日よりはさだめなき軒端の時雨に幾たびか袖をしぼらまし幾たびか夢をさまさましされどもしら雪の庭おもしろくふりつもりなん曉はとひ來ん人のこゝろなきくつのおとをもなげかでをかしさはうき世の冬にひときはたちまさるべくこそ

金澤よし子

懐かしき庭の梅櫻も今日此頃は一葉二葉と散りそめて坐ろに彌生の昔を忍ばしめ奥庭の白菊置く露に色衰へて寵さめし祇女が果も思ひ比べぬ誠や柴の戸に音訪るものは肌寒き風の音かわるは居間近く細き音色になく虫の聲のみにて何れを見ても哀れに心淋しき冬は來りけり

中村　友子

片山里の八重葎繁れる賤が伏屋に訪ひて來るものとてはなく只月と虫とを友として心をやるのみなれば其さびしさいはん方なきを此頃は木枯の風に散る木の葉柴の戸をたゝきて慰めがほなるもをかし籬に咲ける菊の花ははや香ひもうすらぎて朝毎に置く霜に千草も枯れはてたるいと哀なるを虫の音さへかれ〴〵に弱りゆくはなか〳〵にかなしふりみふらずみ定めなき空の時ゞ時雨るれば紅葉ばは龍田川に錦を織りなすめり木の葉の大方散り失せたる梢におぼつかなき三日月の今や散らむばかりにあはれなる光りを放つなどいとかなしきは皆心からにやあるらむ

師岡ち世子

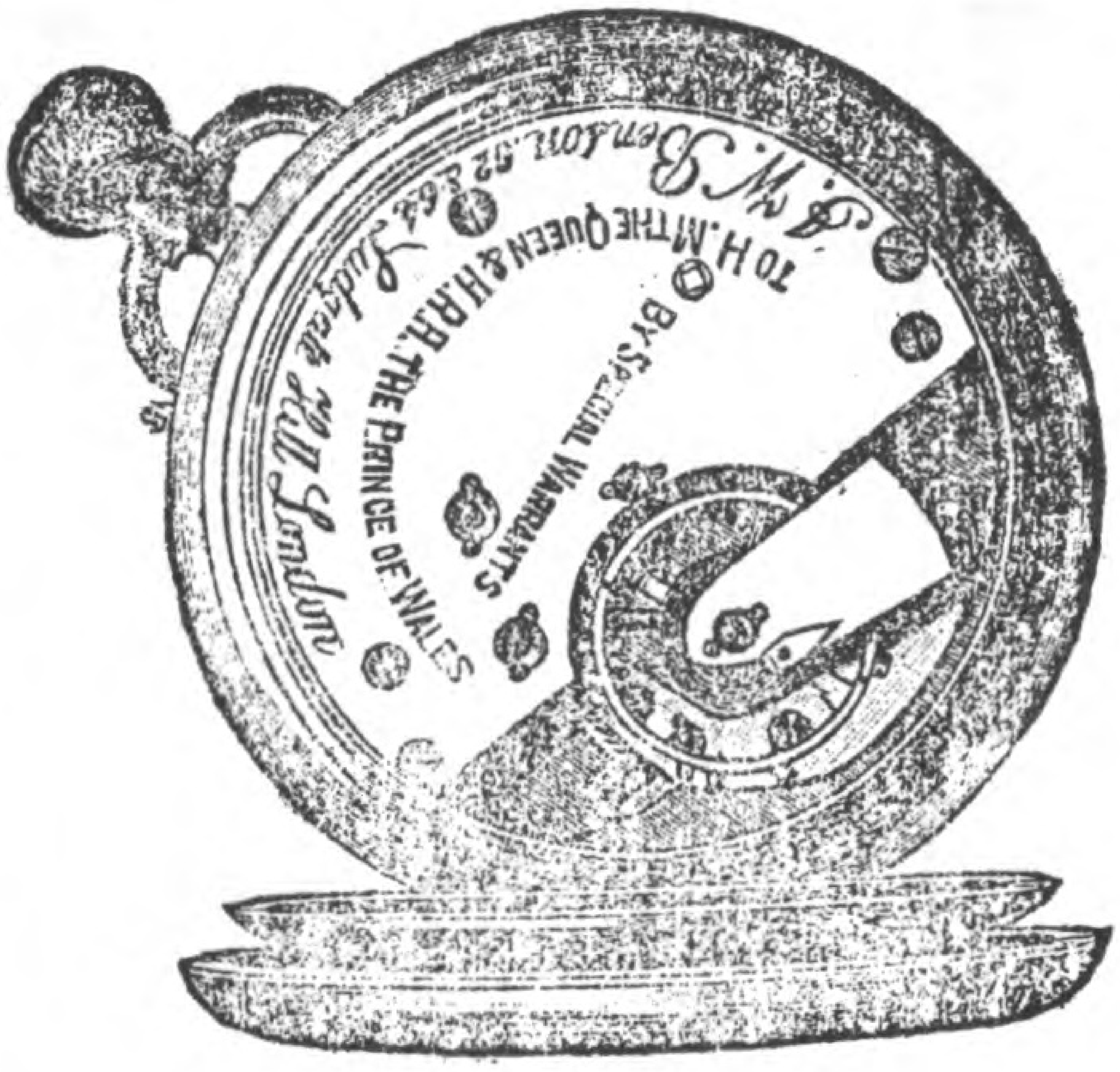
道もまどはずして打つけにとひ來たる冬こそいとわびしけれのらとなりにし庭もまきも立出で見ればおきわたせる霜の色吹すさぶ風のおといとさえわたれりけふだにかゝるをまして雪あられ打ち降らんをりはいかにしてかなぐさめましと思ふにいよゝさびしさのやるかたなくてなん

横山きみ子

啼きしきりたる草村の虫も聲たえてきこえずなり咲匂ひたる籬の菊も痩せ衰へて見る影なく常さへ淋しき我庭の人目も草もかるゝ冬となりては中〳〵に其の淋しさいはん方なし唯きくものは軒端の林にしぐるゝ音高根の松に吹すさぶ嵐の音あるのみなりさはいへ寒來り暑往くは四季の循環の理なればさまでこゝろにうしとも思はねど冬來る毎にたらちねのかうべに霜の置きまさるを見るぞ腸斷つばかりにいとも悲しくなんおもふ

天賞堂時計及鎖發賣廣告

瑞西國製



十八金側無双裹三枚蓋二十一形龍頭卷時計甲價百三十五圓◎乙價百二十圓◎丙價百五圓◎丁價九十八圓◎戊價八十五圓◎仝中硝子甲價八十五圓◎乙價七十五圓◎丙價六十五圓◎丁價五十五圓◎仝片硝子甲價七十五圓◎乙價六十圓◎丙價五十圓◎丁價四十圓◎仝十四金側無双甲價七十五圓◎乙價六十五圓◎丙價五十五圓◎丁價五十圓◎仝片硝子甲價六十圓◎乙價五十五圓◎丙價四十五圓◎丁價三十七圓◎仝十八金側無双裏三枚七曜及日指シ月ノ満欠十二ヶ月付價百四十五圓◎仝價二百三十五圓◎仝コロノカラフ引打チ付價二百七十五圓◎仝價三百五十圓

銀側無双裏三枚蓋二十一形龍頭卷甲價四十五圓◎乙價三十七圓◎丙價三十圓◎丁價二十五圓◎仝中硝子甲價三十九圓◎乙價二十七圓◎丙價二十圓◎丁價十五圓◎仝片硝子裏三枚蓋甲價三十七圓◎乙價三十三圓◎丙價二十九圓◎丁價二十五圓◎仝中硝子甲價二十五圓◎乙價二十一圓◎丙價十六圓九十錢◎丁價十一圓五十錢◎戊價九圓五十錢◎己價八圓◎仝鍵卷甲價十八圓◎乙價十五圓◎丙價十一圓◎丁價九圓五十錢◎戊價八圓◎己價十圓

米國製

十八金側無双中蓋付二十一形龍頭卷甲價百十五圓◎乙價百五圓◎丙價九十五圓◎丁價八十圓◎仝十四金側價七十[illegible]圓◎仝價六十五圓◎仝金着側甲價二十五圓◎乙價二十九圓◎丙價二十五圓◎丁價十八圓◎銀側無双甲價二十九圓◎乙價二十五圓◎丙價二十一圓◎丁價十六圓五十錢◎仝片硝子價十五圓◎仝價十三圓五十錢◎仝價十一圓五十錢

金製鎖

(二十二金)三十匁付價百十六圓九十五錢◎同二十五匁付價九十九圓三十七錢五厘◎同二十匁付價七十[illegible]圓八十錢◎同十五匁付價六十[illegible]圓十二錢五厘◎同十匁付價四十一圓十五錢◎(二十金)三十匁付價百十二圓◎同二十五匁付價九十二圓五十錢◎同二十匁付價七十四圓九十錢◎同十五匁付價五十七圓◎同十匁付價三十九圓五十錢◎(十八金)三十匁付價八十五圓五十錢◎同二十五匁付價七十八圓七十五錢◎同二十匁付價六十三圓九十錢◎同十五匁付價四十八圓七十五錢◎同十匁付價三十四圓◎(十六金)三十匁付價八十七圓二十五錢◎同二十五匁付價七十一圓八十七錢五厘◎同二十匁付價五十三圓五十錢◎同十五匁付價四十四圓六十二錢五厘◎同十匁付價三十一圓二十五錢◎(十四金)三十匁付價七十九圓◎同二十五匁付價六十五圓十錢◎同二十匁付價五十二圓五十錢◎同十五匁付價四十圓五十錢◎同十匁付價三十八圓五十錢◎(十二金)三十匁付價七十圓七十五錢◎同二十五匁付價五十八圓十二錢五厘◎同二十匁付價四十七圓◎同十五匁付價三十六圓三十七錢五厘◎同十匁付價二十五圓七十五錢◎(九金)三十匁付價五十七圓五十五錢◎同二十五匁付價四十七圓十二錢五厘◎同二十匁付價三十八圓二十錢◎同十五匁付價二十九圓七十七錢五厘◎十匁付價二十一圓三十五錢◎市外遞送數十錢

東京市京橋區尾張町二丁目
十八番地電話三百三十三號

天賞堂

女鑑第二十五號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京麴町郵便局へ御振込可被下事○郵便券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず會員領收の上は直に女鑑を發送すべし若し強て領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未稅の來書ハ一切受取不申候事

女鑑

毎月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
全國無遞送料
廣告料五號文字廿三字詰
一行十五錢

明治廿五年三月十二日遞信省認可
明治廿五年十一月四日印刷
同　年同　月五日出版

發行兼編輯人　東京麴町區平川町五丁目十六番地　西澤之助
印刷人　同　平松寛三
發行所　同　國光社

國光は忠孝節義の士氣を激勵し固有の美風良俗を扶植し以て邦家進取興隆の基礎を鞏固にし殖産軍備教育の法廣く宇内の秀美を蒐め富强の策を講するを務とす其時事を評し活勢を論するに當りては公平の眼を以て大局の上より國家の利害を觀察し太古に溯り萬世に亘り時流を趁いす世好に投せす卓然獨立正言公議眞理中道を得以て國光を世界に照被するを旨とす

國光

每月二回發行
十日廿五日
一册代金拾三錢
但全國無遞送料

國光第五卷第一號目錄

發行所
麹町區平川町五丁目
國光社

(國光社印刷部印行)